耳囊

四

1 暫 5
465
4

耳嚢巻之四目録

一 耳へ虫の入りし事
一 耳中へ蚿入りし奇法の事
一 小児餅を咽へ詰めし妙法の事
一 修行精心の事
一 蝦蟇の怪の事
　附 怪を為す蝦蟇は別種なる事
一 陰徳陽報疑ひなき事
一 陰悪も又天罰遁る事
一 狂歌滑稽の事
一 狐狸のなせる狂気とし出る事
一 本星月と好みし狂歌の事

一 以て奇物ある事
一 鼻血を止る妙法之事
一 鍼婦奇奇之事
一 達斎滑稽之事
一 大久保家書並淳白之事
一 井上氏格言之事
一 猫物をいふ事
一 人にはくの癖ある事
一 古風質素の事
一 亀戸村道心者身の上之事
一 貴賤共品経とまめ成事
一 京清塚の事
一 東府異変を得る通之事
一 油堀と蔵を妙法之事
一 戯蔵も工夫有る事
一 鯛屋源助危難之事
一 高町にて奇婦に逢ふ事
一 小児之産湯と引事
一 雷雹をとらし事
一 異獣もその女不思之事
一 化獣の衣類等不分明之事
一 疱瘡神狆に恐れし事
一 聖孫その志しある事
一 螺鈿の事

一 人首ニ変シ狐之事
一 織人の風事
一 悲さ里説之事
一 青佐左衛門聟と化し事
一 野物生黒猫の事
一 御手奇績之事
一 産場ハ首遠之事
一 元義之霊文ニ及ぶ事
一 康見魅ニ無縁の事
一 怪力の事
一 英猫の事
一 小田家之仮名所為事
一 松平康福寛吾の事
一 豊国人奇術之事
一 奇病之事
一 小児行衛を隠く化之事
一 金子うつしもの事
一 織人の子と知り親之事
一 胴骨と子時説之事
一 美濃国孫次郎狐之事
一 元狐尾之の事
一 同異ニ動く毒之事
一 脚労出るの之事
一 古ハ武笑酒さりもの之事

一 鍬と不動呪之事
一 八坂瓊の由縁之事
一 津島清之事
一 狐の神と人の化作て見す
一 鉢山寄りとも避事
一 眼之妙法之事
一 歯の妙薬之事
一 金瘡焼疵の即薬之事
一 館林領にて古狐石部と猫出し事
一 鬼婆の魂魄忘と迷し事
一 下女の幽霊を取く来し事
一 浅井備帝大忌之事
一 悪縁仏為の事
一 祝前傳授之事
一 蔵主は自殺の奇動河る事
一 大名之職業あり事
一 歳暮もの内性死事
一 姪妊之事
一 劉表の子の之西我とも記之事
一 信利継生る石碑の事
一 坂和田氏祈前の事
一 渡辺の氏姓の事
一 牛の玉の事
一 鬼僕之事

一 蝗痛之叓
一 章姫之志来朝日ニ思紛之叓
一 津和野須磨郷之事
一 伐れし葉に効之叓
一 猿更奇妙之事
一 幽猿子の叓
一 田鼠と化ス呪の事
一 劉章之理ニ於事
一 女の髪を喰ふ猫之叓
一 瘧年ヲし免し事
一 老人ハ敷例の奇ある事
一 獺療ホし死人の事
一 忠信天狗と獲取事
一 雷と嫌ふもの有りの叓

耳へ虫の入し事

寛政七年卯六月下旬池田筑前守営中にて
語りけるは・我か組頭勤し事あり
し由ゝ事とせられ尋ねれは晩の事と
り頭を傾け居しに耳のうちへ羽虫の
如く覚へ飛入りしに其儘組中にて申出
しけ汁と押ひしき故色々にて絶かたく候
身中になりてなやましく乏しく親類家来も
うち寄てとやかくといたし居しに或る百計
なし薄き物にて捕れる耳のうちへ
虫の入りしを取出せし事ありと取出し
くれと彼ないにて申候に右の仕斗のことく申

悪しき事なる爰の山蚰蜒の耳へはひりくるしむ
と見しよりのなく何の音楽をつけて耳
のうちへ入痛む所をしらし後蚰蜒ありて
引出しける音楽とはかくのまゝ付たもし
と見れば筆つけて傷に咲る虫之蚰蜒
所り印勅を賞し筆なり別段の業なり
もありし万能音のよし一般して用ゆ
しかも何れも耳中の難にて音楽に流ひ出た
虫を付く引出してむし沙汰をせし
此湯は虫を殺し此度痛をとるとて此へも
[illegible]よし[illegible]りなとく

耳中へ蚰蜒入りし奇法之事

又猫の香を嗅りてあはれ耳中へ百足
の入りしは中々も頗をしなるしきものゝ虫
同人[illegible]のあるの者の匂しをありしは
ある人のは猫の小便をとれば大蚰蜒と出
神効と試るのよしいはれるを用ひしより
妹なくせし生猫の小便をとるのまゝに猫をぬす
其の妹のなく捕えて生まるを見つゝ猫の鼻
のなく出る付かれてこれに悉くもの小便をと血
立るよし一事の奇法として覚えりとなし
妙極

小児脇下に咽く傷めし妙法の事

小児の脇を咬ひし咽く傷つくしむはい

鶏のとさかの血をとりて着せしかはあやしひは
うらく治りぬ是は此事世名を衛門
の若枝宗の子に海のあたり太の家の者にて
瑠璃をもてあそひしより

織行精んし事

阿部家の中士何某は郷の精心にて名
年奥清の虚はヤケとしふ癖ありて的
むく人は瀧海とよふむしくして殺れ海き業に
名ひとく晴れ身と出るに欲し強くて
所も糾んてきるに和らの秘密には
知りしかりて一句の風鬼入りしと深めに
船別男を思ふ工夫して我かりに人ならぬ思

我家まて殺さるへき人は口惜しき事かなりと家に
伝りし主人より知りし古画の屏風く主人繪
の主殺をうけてこれを射んすは識人口の
所為なりそとあなかひてうちと討し
焼くそ殺しかれいとてもうちれ事は那我
とまうそ何のふ我と根さく我子と何く
もらくられと射んと学と殺れは我子の
常ととも不弁郷もやいふ海きれはれは
まれも的んとく則うと討我子へさし
何く猶しめ更めしれう衛精心の更衣
来て思ふは別段の事まやいつものことや事も
うなく殺し治りしかそれより終て終り

さしに依り出家も止りしとぞ

蝦蟇の怪の事

附り怪をなす蝦蟇は別種なる事

営中にて同寮の語りけるは狐狸の怪は昔
より今に至りて常にも見聞も多し然れども
怪をなすものもあり厩の住居はその家の人事
衰へて病り枯骨と成り人見ても又床下に住
居せしその家の人かくしと衰へ病みける
ありしある医家に来る人何と申しく
怪ひて気血衰へしに有る自益なくて縁下に
見えしよ何の事もなく縁下を覗きて
此に怪しき物は猫にまてもの類縁下

居しと縁下を覗きに引込みて見るに入りて行
然るに其処をのぞみ何もなし其後
しまさくよせ候はかの床を離し縁下へ入と
入りてしかるを大なる蝦蟇の穴ありて住を
居たりしは色変枯骨の有様を得たり其
し是を全て其の仕業なりと彼の病を治し
捨てて床下を掃除なしければ彼病人も日
を追て快方ありける此年の附属の人
保の物見にまていつもの人萬事のことき庭前と
縁の居しの是の事なりぬ其例より大き
なる毛生石のうへとて居しよし是も縁下
より追ひてなく石も出しよりは三尺余も有て瑞

し場なく逢ひ来り驚しはりてにとあくと
ゑくしのこゝん経ゑの色そと吸ひりとゑて
出も出らひ平らの口の間へ入りなされは鼻ふ
し聞きの人爭とゆんも息ゑ[?]は出され
ゑてまつ揮生民の飾りしは上雅ち総の息な
て色を訓とうりし年あり[?]られも爭と吹け
しふ覇らとれく死やしとちとりけくこゝま
りゑ[?]ゝの出り成しを翌日出ちと唱りて
見しよ覇の形らとけり也しと出ち總の
経りしよし油しり疑と郷り
但紀きの見ゝ事の指策ゝ為[?]するハ直[?]
母の死とゐそ如く指ゑとうしろく[?]

必[?]とゐそと色人の終りし安[?]
なり

陰徳陽報ひなる事

寛政七年乙卯のことなるに青山家人[?]文[?]
組ゝらの同心何[?]来嘉[?]唱へ年[?]まて一組の[?]
切米取[?]もれさりしい取り同心仲ケ間の[?]切米
金とゐ[?]消え失せにけり遂くの道なれハ
故りさこ迄かなくとかりくこなさる[?]
くなりてかなるなく故りんも同心仲ケ間の[?]
まくとてまて家中より[?]りてかる[?]
別れ故りしよ[?]まて請れし金子[?]
のまゝかなる[?]ふへ[?]かなるり[?]

八幡まうでしてお参り御出右衛門のかたへと尋ぬるに
いつもかはりなき顔にていられけるにやせん方なく
十方にくれ人を頼みに頼み所々と思ひしに
まつりの留守の由にて無法人ありかね候て
所詮にはとかくと存じ候併しながら年寄
そのもとを頼みくの事も是非と申し候て
かかりあひにならずもとよりの由にてまつ尋ね
金を合せて大金子の引受尋ぬるにも有無
と思案の上さへ是非と止めかねて世話しけるに
其志紙結実の由とさらに對面を申入れしに
事あらましてつかはすみづから思案の上にてもいかにし
この上は次第にかれは結納のいはれ存候への

何事も何とやら申されつる不便に思ひし事を
人の節に申しこし對面いたし候事申入れると仰けれは
かくして其上にてかく尋ねられは仰せの事申すより
いかなる事ありしに大かたの内より金子入用とこれし
その分にかかる身の大切にも及ばれさう候事に
大事の内を催しるれとんの結納事付御尋ねと
まあらへ持参をし由と仰り金子の有るとて
と尋ね出しく世話遣はして大金子を渡し
まては何にも是非の後に大きに驚き悦び候
いろいろ引受けし大金子返済いつとて上る
我身といふ身にもなりて此後の仰せ候ても
ますます喜びて顧りぬるまでも今の親

ともいふ便宜に人々と唯よ頼まんやうなし　これ
まことも我にはせんすべなしと思ひつの事共なる聟
と親太傳の跡を継ぎ給ひける和田倉内所領
下総なる所領へ入ぬ。總ての思ひの事人下
総なる事なり。唯今の所領へ入りし人は御家
中にて我が何しに人まで尋ぬれば下総
なる事にては何の様子御ていかなるや下郎
の身にて其ことは若くは若く文九も六ヶ敷とや
思ひなん承知せぬまで一向ぞ合点ならぬ様子なく
て太郎は頼りて其の用向をうかゞひしも
さる事にて世にいふ様子ありて便なしとて其首尾
用向自身と彼家の事共なく也とて出来し

我が身は金子と共に一事某様にて
て其と読みてさらば故と申しゆかりて尋ね
まことに彼人が病身なる事は門事人様子
なれば早まり思ひなくて頼りしなる
ありけるなく彼傳太の用向の様子来りて
それは是非も様子を聞ひく事なくそれとも
其事は彼傳の中なる事は我身を今日は様子
其の事なり思ひし此主人の門へ西参まで
まいりて我身の事と尋ね事某様申し出
なひし事と門事人より中に立つ事主人
より聞く尋ねの事なくの其旨ひのまゝにて
歴々衆ありて御指図とかはり其上以後人の

家作ハ大ぶんなりの高縁(?)にて公儀(?)に掛(?)く
れはまりけりとて、いてし彼(?)か家来を切捨
てしかうつ帰して帰りける也(?)

強悪も又天罰に逢事

越後(?)嘗鼻(?)辻かゝる所に帰りける佐太(?)かゝるの用(?)より
二三十余人の金子を銭布に入れ首にかけしとて人
ありし二人まてうけとられんと云ひしに取りし
人々を相手(?)と云ひまはれハ肩(?)へいへんしけれしと
お(?)役して其人の強盗殺(?)し彼人の家を
見まわりとく在家(?)を捨てけりし其の名
前(?)強盗(?)くそしく来りて金子三百とかいひ(?)
思ひかく飯しけれハ強(?)ひつて金銀(?)弐百(?)を

出ぬるはませしゆふといひし支(?)強盗(?)等(?)を
見ひく有(?)ける殺(?)されけれともひるけしとなす(?)
るしか殺(?)人く彼其の故郷(?)へ帰りて留
くハ旅中より筆しける天罰の至(?)する
や強盗と類(?)を知(?)えしけるまでも今は今(?)子
と強(?)し殺されは皆くいひける怨(?)すともあり
ける年久の如(?)蛇(?)や一しき京(?)有り仍(?)取(?)出る遠縁(?)
は今ハ忘(?)らんを旬(?)して在(?)家(?)彼強盗の
かつりしは現(?)りし天(?)気と見へ(?)人(?)ほ(?)仍(?)る

狂歌滑稽の事

安永寛政の比狂歌(?)とのま(?)な(?)線(?)とも(?)
く狂歌を詠める御(?)氏何(?)がし麻布の

稲荷へ人の形ちを画き眼へ釘をさし けれ
とかく
目を書て祈らハ鼻の穴二ツ耳であらけれハとかくの道
と出るくれと下ケりけれハあけの日其の人ゝの耳
へ釘さしりけり
眼を耳を出もしもう釘ハ筆様も抜きうぬなり
とましくれと上けりけれハ世の人ハ絶と止まて
藁人形へ一面に釘をさしりけり
稲荷山にうぬ祈まうる釘ハぬけるゆゑ藁の人形
をれをうけりれハうち後ハ出の形もみえくなりぬ
狐狸乃ちえに狂死をし女の子
寛政七年の冬出入家の奥より勤し女

宮仕を出奥まてハ二三を数ふりよく風よりま
出ひ金出きしりる所へんとその者を
尋ゆりれもゆのよりくみえされハ終に
行と遠ひ河岸蔵屋の池にまりしも
数ひりよりの日数ある者のそ同し七日
の女まりと来ひりるもまの前の池ハ所さ
まとゆし見へるうそ水を汲とみえて女を驚
さ蓮池をし夜同所風ハ夜中に行まゑと
出のあれハ極安女頃のよの様く入る由と
みくく大分まて失り押りれハ彼り來ね知女
夜酒の本と尋く尋ゆひしよ始ハ病に
切り尋りれハ家まハよくらかすりまて宮家く

縁に付今ハ是を婿と定めと中出入いつらうぬ所と
申侍れ共その義と志らずして何となく
よそうして尋られハこたへしハ我住つくしとの
ゑひやさんさく檻の下へ入りける也へ出入り
外て両二人立のへしら運ひ檻の下と行て其
一ケ所此檻下に於て其座延にして出て其
猿業の能を無く此所住居あり是ハ是文の外
其に尋しに無る事共の男之申して
猿とも志して不義様けり狂人のありさま
仰天し役人もれ不と是宿を召して
頭とも申しける両親ども断りしに不叶
業ふを頼し広まれと申へられる事也

おくして世経死御ありしとや
末星月とぬけし彗星の年
寛政七卯の年の秋末星月の内とぬけ
しるすありしと人く云ふて変近き縁して
其れ縁しける彗星何されける増實記
縁るよし
月の内に星此一尺斗亙ハ同しよ文字の
姉ありけり
此ハ亭功ある年
水に渡し候ありしハ其あんしよりて唱へり也
あつりこのゑまふせつく擬りる事ハ此あり
らく降って毛ありしくせんりうまき

そのまゝ此書以家ニ焼亡んとてもしいまの
秘ありし鏡ニ写して鏡するかたいの如く鏡出
いとうつくしと見て紅花経て出ゆいは以ふ
まかりて出あかりこの影付けると清めて行き
くりあかり鏡を持我天意のことを云ふ也して
海中に魚のやうにして一向に影付けるなれ
富りて其利のありことより家婚の如く
此に掛ける鏡付て見るべし又清めて
頂ことを云ふ也し櫻ある卿に頭講ふ
此後末なやしと記する人より頂りけるにぞ
是は及ぼすべしあかりこゝに寺経せうく
のこと有て書利し鏡もはし来るかと頂るべし

天窓のことを見るべしふいは人筆を請ふ文の法
まかる御ん以て理外の論なるべし

又

鍾馗ひは頭りその外諸書頭をなす所作とかし
以よ紙を四角ニ切て此の文字くと書て出
球のうくは浮も来ゝ云事頭歌しを見れ
ます二人の事にあらじ我よれは人一両人頂りける

鼻血を止る妙呪の事

鼻血出る人あらば何れ成己ゝ是りの鼻孔と握り
右なれは左は鼻孔を握り両鼻孔なれは両鼻孔を
握れは盛なつし此云事にて止むし以て人女等
是は気を握りて呪に妙なるべし

織婦若歌乃事

寛政四年の冬青山下野守家士工藤より伝来
のおりふし本多謙蔵の里に見えしと伝えよ
御上若菜なと会しけるに縫仕の女若菜
相そとしつ毎りの家へありしと彼家士申して
若きより本多讃岐の妹なりしは雅兄の家のほとりや
よく縫うて書物ありしかは彼女悼りける事なり
して縫生へ入りしはほと多くありて
書つけたる詩歌しるしこれとなる
若菜事はいふにつけ藤原の申しるとて
とありけれは人の伝りて縫物申せし

これ織し縫付けしと申家士のゆかりある人

御しられは書留む

連歌師滑稽之事

白壽とよしいへる連歌師人の寿賀の句をたのみ
けるにいへるはくれぐれいまも西の月
なりとてせられはいはれは縫とよみて縫りけるに
返しに根菜なりしの然得る由申すけるは
大久保家士悼直之事
寛政七年三月頃松平越中守
浦くりぬくの中ありて於根岸川の川崎
家と申せしありしと申有けるもの
て大川関家くり織る名と申しけるもの
川関家の家士大久保加賀守家士大木某

是等は宗家より御自筆を下されし類なるの事なり
し又雄中なる佐藤とし御許なりし中にも筆
とぬき〻無し〻雄中後〻も其の精勤を感賞
ありて加賀なるつとめ無き迄のうち褒賞下され
雄しや其の書れと家よりのこと
今日相本門御宗家無き折の先に御改造
まて筆跡の和書をも大東よ候る筆の後
御身は自らの御改め候は家表門
是中まで、てなくは自筆加賀なる後より
此をも無事其の在る大方候る年に是お
見る所をも厳重精勤の一所くま加賀
出る後御すく筆なく事にも後に及ひ至る後

御所方筆跡は御摩りに依る御自筆の御意為るの
存ぜ此一部も元来ゑ中に是まで筆者は作業
出て多候る〻其職とする雄中者の
事と称して家より候し無ね

井上氏相伝の事

此家は安永の比井上図書と云ふ人の書流の伝を
ありし〻城日逢中にて他組の書流を取りし
此家あり房なる遠中にまて〻家〻安房なる宗家
遠の図書は安永にて馬と章也無かりし也
家敷なく組の係と無りしと安房なるより
図書安永の家臣の眼と面と合無りより一つ
家敷なりのまへの御もしと図書咲く

人の腹蟲気の用ありてハ無事なりとて往来の
さまたけなく途中にて蟲出て有るとて
もひんと思ひとりハ後中に人合ひてこれハ此
様なる途中にて蟲出て虫あらはれて下
遣すへきと申すなれハ御厳敷様
いつはりなき事の様にて候はんと申せとの
安房守様被申付て家来も傳へて一日中に下
家の者驚き急にて候へと申て人合中にも是ハ
これ何とて事によりて願ひ来りて申渡
聞へとなり

猫物をいふ事

寛政七年の春牛込山伏町何とかいへる寺
院秘蔵して猫を飼ひけるか庭に下りし鳩
のあそふを狙ひけるを和尚声をかけ
追ひ逃しけるに残念なりと猫物言
ひしを和尚大きに驚き猫の逃入し方へ廻りて
押へて小束を持ち汝畜類として物をいふ事
奇怪至極なり全く化けて人をたふらかし
なん一旦人語をなすうへハ有体に申へし
若いなみなハ我殺生戒を破りて汝を
殺さんと攻けれハ彼猫申けるハ猫の物をいふ
事我等に限らす十年余も生き候へハ都て
物いふものにて夫より十四五年も過候へハ神
変を得る事なり然れとも右年数を保候猫無之

よしとやらむ事忘れしは此頃までもてはやされと
いはるゝ将軍の館より出て御尋ありしに訴
と云ふりて申されし猶は其の事おぼつかなくとも尋ねよ
事なりしかぞ其なる事既に今日なりし
とおほせ出されし我等も聞なるゝ人は代
らの儀はれん此までの事にのみて御為申されは
御為に對し三年となりて出られし又後に
ちくりしるへきりしと後には其時事なりし人の
知られ侍る

人々は最後の辭ありき

寶永六年の冬の事なりし御用と承る
御見聞師かほり候事多く人々羅人とも申ける将軍

申しける武士有りて是は一頃より様へき後文
いかなる事か申さん書付とりて此所に起きて出し
様なりし年寄なる物語をしへ給ふ御殿に是
こゝに得るも事ある申の人に百両なりても又給
有と共に有りて直に数多もと申の人
毎にはあらしの手紙にて後の事なりしいかにも
事もあれは気をもみ候ても様子見候て御
其の人も得るとも是れ其の後と様子申るとやら
あらし一代をと後々後しく有りて石の年
いかにも今なるの武具の中にも人々にも世々
又無きに此百両余りては此年もこの様にと石
分千人余りとも申して此身事太郎とやらとも申て

然し御公儀ニ而ハ翌日相改大借ニ相成候ニ付出来
候而も宜敷候ニ付百両余しかし積中ニ候ハゝ付
偏之所好の銀子積り合候而ハ百両余借金致候得ハ
是迄を入置候之こゝろ得と申候而ハ何とも一向ニ
相成不申候様相成候事ニ付而御用金之儀ハ
御役人衆江相届候様被仰付候而御用金之儀ハ
以後御用金相済候而御借金之儀ハ翌日取立候
之外御用向三百両ハ相成候而も宜敷御事
御家中の様子も一向被存候儀ニ付賃銀
とかく御用之儀一円ニ而ハ難相成候由御座候
其内ニ而則出来候得ハ御対面も可被成御座候人
江而則相成候様と申来候得共猶以御談以来

今般改メ候様被仰付御内借ニ相成御中入候間
御領分之者ニ而も相成候節追而金子二千両ハ御借入被成候
成候二十両ハ翌日之御役中江相成候二千両と御座候
御座候得共相成候而ハ御役中ニ付追而御返済可被成
候哉相成候而も無心ニ而ハ難相成御座候ニ付御用
其上ニて御拂米御蔵ニ而少々御座候得共御
御吟味之上此度ハ是非共可被成候様
御様子相成候得共之御事ニ付被仰付候
是ハ御用向御役人衆金子相済候而二十両相成候
御役人江申達候而新規ニ相成候ハゝ申付候処
其上ニ而御役所江差出し候間御請ハ不申上候
和御請之儀ハ以後御役所江相渡之御用向

いまけ候ニ付ニんとやりかれハ大武蔵以之外憤
り而ニ大頼昌御定ニ御家の将と義ゆへ人東
大輔し大金ニ而ニ成ぬるの上無之ニ見るのす
り兄ある也し我小判半より武具迄ニ而んを
まて御年雑貴とと成も入用と候世ホ紅
之し候中ニ付し紙武以之て對し願候中ニ候将
とも難之候宮内ニ入用も将ニ候ハ人候之無之
用しる之とや候也妙候も神ニ而ニ御り備ニ出入ニ
候ニ而風中ニ遣し候ハ御金ハ引候候之ニ而らんと
お役所ニ而は武具ニ引候ニ而の候も將しらん候
いつ事し新殿ニ而とて神ニ憤り飯りし候妙
殊ニ父親類と而も日く三百俵の御家と身ひ

年ニど将り徒しまし相御卯下の山々ニ而とりまらん
ニ而海よし家へまての将も名ニ候ニ而名
あれは大候ハ我をとあらんより将也やい
年也

古風質素之事

板倉二代目周防守年頃也城下ニ有之よく
家年の菜より白無垢布ニ而て新調とや
身を手入と武家の衆成りて白無地新調と
之候身の定成見候いまし紙衣之也候ニ小袖
候古ひも而しへ候とも年頃候用ひ年ニ新調
之候身ハハ之候かまへ候へ新調止メ年ニ候へる
と武家も総てニ而も板倉周防守直々の候ニ而

なりける時諸侯にめしかゝへられ白紙一ツ引綱に
ひく我もまた家来となるべく願しけるも
むなしき時節変化ハ定なく此年と経し歳
亀戸村荒れたる庵の年
此年の人青日開けて亀戸天神梅ひらき
の道を逍遥して我が庵にかへりて花ある
後みちあゆみし後逍遥なる墳のちかきにて菜と
茶をもりしよ此とらひ菜と共にして
経く明けるに俳道をなん風雅と称するも又
えんに古代のかねも更に後世の庵主も旅に
も道んとしての翁のよしの俳名の名と尊ぶるよ
道心者大意とつきそし名のると聞しはや

我為業にはあらでまみりしに甲斐の府にて
山梨郡末孫なるの俗にて其年ありて
江戸表へと風流家を亀ひ深川なる草庵に住
とはむ女ありかくして頭巾をひ此村方
は頭巾雑用をもて倦みしく南の亀手を掻き
俳諧の師主たる年季を今までも終し
若此る者とりてあと試みまでもありしとは
南寛ままゑんと江戸へ出年の経て遂に出
身後をしと云ひして習意したるに我も
我はかるり俳諧なるし女房御子今までと
持くりかへ知すりぬるその世を不古くは
我事も知我をと経し身にを経む思しの

憎く様へしさるは兄弟と定りて年月をふれとり来も
なれ合ひ更に他人へと隔りなく親しんと心を定め
てよしくと弱き事の出るは河のさんと心を結は
まりしより親方が合まて猶と思はいて隔られい
人々と煙しこりける本家様めきや也りし継ぎ
御者にの太郎八とて以前顔なじみと成て
年月わたるおりの内まる継ぎぬれは行方すむ
頼へし親しくて見つべしこく連登りなと
黄檗隠と号し何年以ら女房とて見出し
てそれこそ心しく手と扨き続うすく頼り知なし一り
しく扨いと黄檗りと三年目に麻布市兵衛町
亀の新やの隣黄檗隠庵の女房に嫁りぬると

兄弟は太郎八は継ぐなれは更にまで一両年も浪々
しんと律ひ太郎八は後継所の何し親族の相出逢
あらて我等今日まて隠居いたし候
さて又兵つ紙中に候更より道心なんと律ひ申候
町へあり道かんは其の由く頃は我等を侍ひつ
いらしく相勤申候と申入合ての黄檗宗に入りて
得度と好き殊にやさしく黄檗隠の女房に
なかく行るしこそみと称く其事を何台の
おりとくく嘉く思ひ是人なと惜しかる兵衛と
く女と嫁は大まひの金子と以て家借
不便と思へりを絶えぬまて尋ひれして
立返しして娘のこと手ら捜りて御揃ひ

かゝる丈夫なるに驚き見れは理なくさりとて懐けり
新五郎八捕へ押へ汝は人の女房とそゝなる
し金子を盗ませ立返らん人は浅織の張本なる
りとて引くし少娘にはりたる女の家潘家の
もの立集りしと彼雑町之親分新五郎迄
立過ぎ見れは待ちたる事なりてと則ち入子家の
立すると押へて彼黄金屋の立寄るよ此ひなる
も此侭なり所より此より五郎兵衛まて行すくし
之女房返して金子は返して何の事なり首
代と知りてあつかんと妻とりりしと家のまゝ
一ところかりりれは一つまてもその侭に任して彼
女持返し金子三十両立分首代なりと写して

金子三十両ほどの黄金屋に差上とて申しける者共
はの送りの名所連れ行く所にしてかまへたる
女房は取るる娘とて殊なるまし髪の毛をとり
其後も物様子なりしかと此宮司真根もたらて
一ト雑町の子分は我先ず引金とも
事済みより見よりこれより見るの色は商ひ
此よりくし若く見れと中年なる一年ふらり
とも黄金屋より訴へ金子を引返す
様子も知らねは前端者には元新五郎八なる
是とも女郎見るやを軽くいふはやう
て新五郎八彼者のと呼ひ見るまて幸都へやう
感心せり立なりしも女の気分嫌く商ひ

ふりまし時節そのまゝおくりて一旦死を極つる
事なれは右様をとけ申さんにハ如何に世の中に
立まじわるべからず其ゝ東西を尋ねて見立くる
何となく儒仏神道の道にも学び聞て何程も
永井氏は此事を学ひ聞て此代の後の世まで
その一分ハ生涯を送りても忘れ難き
身分として一生を楽しむ事に用ひて
縁しはなれぬそのもの名も今八代まで伝りけれハ
彼ハ世俗の今の一分の生業なりしに仏法
ニ就ありと鮮事を御八代にも学ひ用ると
其ゆめと語りしと之

實情忠臣亀鑑と循ぬる事

明和元年の頃下総国古河に貞節の百姓あり
治郎兵衛といふ者の娘を其治郎兵衛か世話にて
年七十にて母は一生是を嫁として
と頼しけると両親もかしめ大坂より江戸橋町
小田原町の宗治郎を聟として江戸へ
参りは此に当り京町へ通ひ大金と共にして
りりて後江戸を大坂より出生し村方へ帰りし
一日とて心を尽し後を安堵もなく思ひの
思ひつく母の願ひを成就し一日も早く
老いつく頼ひ同ひと申しける京町まで深く
利深き縁風の生涯をいつしかと其これなる
生涯を無事に生し又く始ひけるをとらい

に随ひをしらするに氣色をみられは又〻御家
次郎右衞門江戸表へ出し其生の事鋪ひられ
とも娘をはなれをいはぬさぞしき一子をと寂し
かんを恋慕の取為のよし頼しゃくその行て
又〻猫町の取えやく見しりたる娘猶〻自ら
弁解とりて實躰に家業致しけるあひ一軒を
脇大方取らしれ是にて妻のもとへ参りし又く手紙
悪友りさそわれ京町へ出向半藤に馴染め
扨又ゝ会話ときゝひ娘は出ぬ次郎右衞門大きに驚て
早速江戸表へ出向き取次家族の者の手をかけ家を
去る家主の同宿となりしと一軒手代共の中とも
わけ御田離勘當申しけるか次郎右衞門は

ちんかゝすく忠兵衞とても取られ京町まて此方
目を懸し萬屋醜郎の子ろへ尋ねしに萬由
請し事をも忘れたる由を取るは在しくる先き
又〻継兵衛と付所のもの世の中し半藤事と
まこの引合取らされはを京とて名残
迎ひ御難を是よも手細く咄しひ四五日まて
し幸ひ時機を請いとを御許の方に安堵とせる
御手の恋慕をのまや次郎右衞門に拶をと様く
尋向しく曲財本位あらくい秘方へ来りのまて
てゝたか宿へ使ひ会話事をと申まへ兩家半藤に
何分尋句のかくは正しきひ引合をこの事とて損
料ゝく金銀出とて猶〻会す寺ゆ町の者へく信やく

はたちにして半三郎が跡をつぎ太夫となりしは何年比也
のころより語もよく節もよく入用ハ我身よりおもん
じて親方に世話いたし浄瑠璃もよくしかし好きにて
生涯もいつと限りなく語りしにこの姉をいつもありけれハ年
よりてもいたしこの中也 次郎右衛門
比は次郎右衛門へ姉に長八といへる者の麻
弟子浄瑠璃に語らるを聞て二三度語りしに卅七八ハ
夫婦にして半三郎の其事わすれしかるまじく
大にはかるその外に深くむすびいたしまで
るはいつまでも此事をば未来へなんり 男気なりしも
のまや文ハ子細やありけん一言をぬかして大事
次郎右衛門と改名しける浄瑠璃にて三ツ七ツへ半三郎

よりは遠く次郎右衛門とさし節目をあやつりの京都の者
とやかくいはれ其年の如し好く語れくいやがり
はやりてまた次郎右衛門深く親仁もとんぢし
なる上はさしてむ半三郎ハ次郎右衛門へ申伝て一家
もいとその事によりぬれハ深く案し煩ひ
その浄瑠璃と何く語り始まりしより
さりとてはよき曲輪なして申伝へしゆゑ太夫
に太夫の目なりて然も散られい或日太夫のかた
にまかり 娘申御見舞深くせしにて数事見
身のうちをたのみいたし遺言一生のためと
聞かせしにいかなり申されハ其時より加年よりて深く
く世話ありかくていかにもやうの事なりしも

合力をうけ後見人といたしたる次郎吉に事々と
語りけるに伯母も聞き様悟して次郎吉は
年すんと思ふ百両の金は口の上悔りと申すゆゑ
助すへしと頼みは其の夜やうやくに承知なしけるや
こそ如きうるゝとて尋ぬる葉子様へ参りしや
其節本寺の麻の紅殻町近所に引つ越しの前の身の
事に出さばしやりければ是非もなく其の所と明り
去られければ住んゑの郎も休めるきと冠
夜明けの出田やうやく大門とと縁を結び
一しよ暮る人めければ麻布の後町迄尋く
そゝる尋ければ長八に宅ゝ尋ぬる処に次郎
吉と尋ね長八まで来りし後ゆゑければ長八と

この身節深切と感じ年来男気なるもの
なれば頼みしと後見次郎吉一同好きと深く感じ
の世話も清きの長八時より此人の為めにいたし
も身節の世話もなしければ鈴木姉妹を
葉し長の夫婦は後の長女房と年来を知り
二年ともくれども日合やまり年をやり
け出れば将来年とまり抑しくて御年頃金を
繕ひをし始めて抱しけり而して金出ぬる
此度は細井金兵衛に年とて笑へ御年と以てる
もの妻が果報年の世話いたししに女房と尋
ねる事を知らせ今此の金子年を深い
ましけるに出合ひ長八殊能ひ果し又く

國家せんとたくみしと思しより後日に至り人
のためには是にてしるべしとおもひ事とならんとも
おもく盗賊せんと次郎兵衛ハ申すべく
おもく山の手を過ぎりし所に能々考へて
云ふこく市左衛門は頼母に告げんと改めて申しけるに
しかしは申し盗賊しけるとて後増家をも召さるべく
と市左衛門と云ふ者ありけるにある与力郷の法
にて名の板橋を踏みあかりて遊しける天の道
と思ひしかり我もまた盗賊となりて入りて
かる風呂敷包と共に持ち出してとて踏みあとに下り
り外道よりの踏み越し御料に迷ひんとすれども
それにはまた人の為に命をも惜しみけるは結構

おもく命と替へて盗賊に入らんと思ひしとなり
今は此方より思ひしかり定めて盗賊なる金子
てあらん何卒貸し与へ御慈悲に頼み候へ
まハ満足盗賊あらず彼に寛恕されや感じ入らん
偽りなく申して市左衛門の志しを感じ
此者ハ盗賊なれど胸に入り其儘盗賊なれば金子何
かとよ此や我と与へんもこれと此方に与へる
まつとて貸しくは家の後を見て得たり出金子
主人の難儀の由ゆゑされば一倍にして返さん
家名のとりつぶれて中手にハ盗賊なれど
何ぞ役所を調べるものに我が非道の生害
あるとハ世を経て刑死となりぬべきに

偏にやと云ふされいだいあらへはれもしらまにいて
逆儀りいても恩を係くこ恩を被らんやと
ひとたびわりれい彼逆儀に何もてあらいは我い
世に様利にもてて今日を忘日として跡を弔ひ
あけり十しと此る独とわりゆくいつくともなく
迯去し長八もさんざん尋ねしが今も段
めぐりけり二十五日はかりしも押載きに庵する
あり京師の逆儀迄平も云し火と降する
しきありし陽石の辺中生出くさつき
御見りもとて騒ぎくそして其の傍を逃れ涸るを
まく加役方と勤し今云つ組の騒来に何来自り
性変よしくそ成ると捕らるて果くやに候いての

とい文にも云せ入る也やり切く文々逃出しと退風
く云く是の独と捕るや知らん独行ち
云へしれく逃げ延びく云々傳町へ立寄り候
五人と妖相しけり翌日に蓬縄々せ八さる
しよ此の市方まで引立て来し処はせく引く
切まてと始へ争ひてつしけると彼処騒ぎ出しまて
見届彼行独々引合しく役儀出く町内役合
もわらく長八よ押さへ悪事とつけしれ其の立合
強ち中とまきしとも云々申せしく入牢にけしけるが
町内の云の人次郎といふ猫町の店へ来てけれ
早速次郎方中第に猫町へ引入候く長八に
仕る云つき付きけり猫町店へ人をやりて悔し

並旅籠に泊りけるに是ぞ又長八が悪事の始りの
よせとて隣り座敷に浪人者も泊り合是も長八が部屋と
襖隔てしのみなれば長八か宿の主に様子を
問けるや浪人者は此辺の人にて何国の人か
是は浪人の如何なる身の上やらと問ふに主の答
にて御座候ふ身分にて長八は日々に何貴き方ならん
命を繫候へ共かく思ひ出て侍の様に
成りし日毎に笠原何某お役の用人と逃
無拠く此度江戸表へ入火と訴へられ召捕
に彼長八が来り笠原何某の方にて京都を
笠原が家の無念を晴らしてもらはんと長八ぞ
思ひしなと云ふにまかせて或日笠原浪人が

長八は塩に入火と浮名を立て何某が此度まて白状
いたし自分は逃れを頼みしに付て大いに長八
家へ入るを追て酔狂の侭に浪人者彼女大
悪し驚き母は笠原が横恋慕せしを長八へ
の罪を着せんと町奉行所へ訴へ出て
頼みし事の顛末を此度長八が訴へ
織に其の役人方を捕へて長八を入牢
織させ其の後入牢いたし其後市中を火付
先まて長八が此度の罪を笠原の何某に向ひ
此度浪人者の細工と露顕なし御所まて
此度此身の上を申すは長八夫婦は浪人者
方へ引き取り賞して仮りに夫婦と呼ぶにいたし

半蔵ハ後おしく次郎右衛門と称しもし也 次郎
右衛門法倫の内恩後有くその一遺こゝえれ
とのへ今に箕へ居るよし 右次郎右衛門の時
しと也しと称りぬ

景清塚の事

近代岩と觀し三代目の池田氏八郎守保
八年 みはる乱のさい日向の国より景清の塚を
とせしと右衛門尋ねて家像鏡下北方村に
在りと以て小さるの石碑とさして立られたるを
中うれいまだ其の碑と云へる年経ぬる
とえく昔もとしよき水鏡居士と彫あり
花八郎ハ和の亭とも称りたる

西く続とも覚りやはする水鏡景清なれとするなんは
と書付其の也へ私役とし手代り右頼か懐
墓への為にと頼みあれて帰りたる歌人
何かありやと尋ける京清の塚と也りく和歌
とへ其の守りし中われいおもわるゝ我をも世
年みりと云ふよく書あかるへしとく乞ひ紀をて
筆とられ
人のなすあいかけまへ水鏡のしかも見よるまなれしき
と以人く書清く先も後のまその也の草川並
ま尋しよ何方の人にや不覚のくもやも中とし
こや云の事つくわりく武者ゐ続公蔭也
あひく

まし後世くまでも無跡ものな家清に及ぶと覚し
名公出家の節ハ明和六年の比より以後
諸軍明し無立中西ゝ者の事ゝ也
其時ゝ要人ゟ得お達へきまて
寛政七卯年正月ゟ御まて林田文蔵殿御代官所
武州　郡　村万五郎と以るもの村役也
處賃ゟ自分之収納として万五郎事訳分之
以るまゝおかしく折ゟ積年総郷ゟ以兄弟ゟ
訳ん同年ゟ与年をおかりゟ観音之返済
主役以後ゟ引負皆く出返て御代官文蔵殿
償俣の訳お以ゟ帝之返済之兄弟る人也
まゐ引負人る役以後ゟ以るし之納以るし

悴万五郎と相ゟ然ゟ而白紙之一通の書面を
残し出奔して行衛ゟ知れざる也ハ右引負ん
不償金ハ出来ゟ間敷とて返済して
其役を譲り候ニ付　御代官之返一統の
手前ハ償ひの世話も五人組一同世話いたし候
之万五郎役例のごとく世話ハ名主ゟ帝之返済
して万五郎か家内へ返納いたし其後年ゟ
理ゟ雅家ゟり之返山刀とて麻ゟ
其る也ハ女房其と尋ゟれハ田畑と家屋
覚入ゟ候とも難儀ゟ之ハ先達而まで以ゟ出る也
世話と其して之れ例と尋家よいゟし候ゟ
ゟ様兔まで紛ゟ自宮中へゟと終とし中中

これより若党へ飛脚にてかくと早く言遣しけれハ
飛脚の若党の跡を継ぎ家内の大騒ぎて
命ハ助かり候事も叶ふまじけれハ帰郷を
なさしと当役ハ殊の中にて急しく此体
いへり十九日百右衛門ハ夕七ツ時口書
と讀みて答として弟に相渡以て一家
未だ猶も未練当役も同女人余ひ居く白洲
の前を蔵後激しきみするとも云頼みて口書
なりは其以百右衛門後為相済これある燭臺
と達して持踊りて口書と讀みは後具へ毋翻と
お職り上い縁へうつふしてかりかりて弟も手押
へいんぬる所へかくされてまた前へ進みて郎附百右衛門

に背く覺り捕へ居し燭臺と首筋へあてゝ押通し
り首筋に当役家来も立蔵り当日に引下
させ申候ゆゑ大名領月代を剃り候節の
お掛り来て血走り候ゆゑ夫と其の療治の
手当中其事申候ハ不届しく候て驚し
て若輩乎ハ大に驚きて又物を申事は有之候も
御法に触れて御上の御判も無之候を西之一件とも其の
たゝ御取ハ口書を出し白洲に如斯く讀聞かせ
口入居をせしゆゑ其上は宗門御改め事済まし
每又其外は其の後を如斯く申されハ下役へ
是御役へ申と自分百右衛門か背く發りし者を
く成り候哉まても口書しかりて御家来共也

判ある人をおらんとも思ひしに文を得りて若へ
也たるに古一休和尚より甚く評判ありけるに
古新背中く出来り三味線は柔行も遊ひし扨
風流なるんは感り地ひく論あるべし然るに
義太夫ももあれ万太郎と称するも今更思ひ
つけ待る古万太郎は竹本保太夫へ申し述る
紀聞よりも甘年餘りける
浄瑠と花てる芝居のり
いはるよ浄瑠璃すると新まても里年とぞて満そ
侍へは荻するはなかり節の宮よ抱し山本部氏て
紅ちして娘氏のかり語りきても浄瑠璃する
小地ともしひ浄瑠ひらく天世奉る元禄後江

語の新るとも生り浄ちのわくよむりし金浄
浄瑠璃をて生する地にと浄ひえしよ節るると
頼へるし新しくゐるる
戯鍵ひも文文みる事
操芝居の芝井文強とは之新来渕とひあけし
宮磐唄和の以よ手の浄瑠璃和まる感想浄
家来浄とは以新浄瑠璃よ浄瑠璃の世へ
あるしは錫世之更るくむるて浄瑠璃の能と取為
あると称ひしは戯場の事のく浄瑠璃を郷めよ
よし引られたる扮人と戯して之る道浄瑠璃の
能ゆ合あるある大ゆりて内気は勝手に行手の道なり
しと大る地ひく是の日よ出り宮談合と一人

えしらぬ出家法縁の相伝姫らで文殊より銀世
の家内へ見せよとありしを銀世と見て驚き
けるより法縁が手跡の見事に達したる人形とも
いひしを銀世驚きし法縁が手跡を盗みて家
継がんとはかりし事露見して後縁と去りければ
家督へ帰り来れりて法縁は家督を出て後
銀世が夫と縁組をと約束して出家の物語をも後
来し事と雖しければ此後の事より出家は
出家とすれば家督なりその子細は見事の達は縁の
内より後に物語りみれば縁組なれば両子と物語家督事
せざるよし菩提を銀世とその家督の娘と家
けるとぞ

洞庭源流発頭の事

駿河の国に無雙高貴しける洞庭源流とて名だたる
の町人ありしが富貴に余りて風雅の道
に執心しけるは秋の中にも風流なるはけふのみと
一僕に召連れ町のはづれ一里ばかり行て源流と
一僕はさしものとあとに一人をつけしぞ
ここに岩山の峰と云ふ所に是を見んと
する者山中より新たに湖水とする人家
すみて面白き所なれと思ふ所に面白き
ここにて岩の森にはあれといひけるが
それより那須山へ人これより一二町さき
もゑつの家作りこれを見るに面白きそれ

旅してよき人例によりてかくれなき筆ひのうち
と思ひきや二町ばかり来たりて垣くぐる也つく
さまり西鼻と見しかば出き来なりしが西照
に精進したりける年によろしき男ありこれまたえ
山伏まく諸りけれ日ごとに泊めけれ雑役しつるのみ人にす
なれば又いとおもひは世路の山ともひとつとなりわれ
奈良坂の亭主と見え一宿なりける所なりしに
様例に遣ひせたりけるものしけるよりまで旅
都なるとものごとく菊綴にて衣をきたるに百類
なてこそもなく江戸にておくなり貫目も類なりけるほどに
源助といふ手代のことにて法かはらひ其外とかくに同じ
一町備ける旅館は旅籠にて見ての調べにて筆をとく

はずれるもめいよひするかなはざりければおのれは佛法の流
れにしばらくは姫なる人の詳なりしかなもし奥ゆ
かし歌によみ人のまゐらせ給ふ五十年の頃なる
原らしきは范女ならく深草山の麓にのこし佛道し
は姫君にて男子なりし華を鋪きおのおの聖君の
中にこそ姫君をかねてまゐらせ佛家によりてなりけり
末世なりきなれどもあれば深妙の妙法妙ひけるは
講師の身上は水辺の懐ろ佛家によ修行せん時は高僧の
送りたりとも苦しみまされば増ひせんと思ふは我宗
は講師にて是は高僧とならんずるか随ひて親に家
釈教にも相続して追なるその経を志しに作て
短歌は時とてもなく言ひ出しまし随ひの法は心をまかり

つと寄くもくありける文とちれは山ゆきと夢もこの
こなたへ通ひしに太郎兵衛 村太郎はすれから
ありけるか伝七 鶴は摩醯首羅
兵七といへるもの、兵村と云ける門前に多兵衛
旅寝してその女と見ひけれは由しけるに比
ゆ兵七 郡兵衛の家にありしは女なと見ひけれはこれへ
と来りて 此由しくかへりけるに 親と共に親子れは
ともとしく 小倉 伝吉と云女のことをとしく年寄な
る人いのりしさまにて金銀おほくかのおかん 親とひ
く此のことしていへてあくのその後に小僧とはあれとも
親といひしくは親類なしとしく皆くまても ぬきこれ
まくいかやうのことは中々 出来るも 難かき事けれは

小兵衛一両年 此節しかれは 其世の 継母にゆかり
女の継しける人なれは 兎角小兵衛の 宿へ人のなく
痛しきさま 行なり中くと 此すく 大なる 騒きて 其頃 以して
兎角しんと 難儀なれは いかりしてあかり 伴継母
頭は老人と 難儀なりしを 気なますは いふへとも なまさ
いくつるも 自分と伴く 小兵衛の 其山ゆきと あやと何ふ
あゝんと 縁なりけれは 孫兵衛のくの 郷へ 縁と逃へしこと
縁と 頼しけれて 頼けれは あやしは 某兎角 相りて
日母なりし 里の 薬師へ 参詣せしなともこれを 仏の
智恵ありけれは 継兄母なり 形と 仏の 前にて たかしくの外
なりと 上人 見ぬもしく 上人の 僕より 負むくとも 施主
色々として 比那里へ 返りし 必道迄 送りし 夢もし

立そこ除く織ものから寶や進甲にて若きもの
ろまて又六人ぞ集りいそがはしく旅人をいつはり
やうやう紛らし見えざる事と此命に存とて大
粮の物ならぬと怖しくそれ卿里へ出我が身
帰りて房のく俟ちを立てくる禮をとるなるとや

書町まて奇物よ事る事

平ヶ一族なる生臭氏杜年のおりから羽番より
急用にて秋秋風雨後に秋一條と下達番所
ーる播の在家と負うしるに前後りぬも修る拯
の大雨にて挑む所をとりく所損と相傳の
新りして舟ありしよ是の側に世をと見えく
うつく帰り居しに倉知守りのそのと見合笠の
新田の次郎なる女をも見合せけり彼女也
女の徳とりるしるに下達するはのおれは待らん
帰りて事けと見しにいかさるものよし立寄く
しよおりし挑むとそれ多く呉服傳おりのその
西人眼をよりみなえ尤の路り外え来し後
立戻り彼姫子とみんとそしに娘をし爺な待
まさもえくて下道必それる彼女はとはかへり
悔やむもあらしも別れしにぞとて飯りし門へのん
とそしは鏡りなし無きに聖目藤と松いたる
行て泊やなし下達くものを門柳なし無くして
難満て月日経ちしれなしや疾病と気の毒
よ形容とありまるなしん

小児産湯を引事

出産後小児ニ臍附より産湯を引ハ産婆の役目
なり二番湯まで二日目ニ湯を引事これ又定例
なる故ニ或ハ三十三日の内ニ二番湯を引事を
何ひ人の頼りしる事ニ頼ミ生まし二日の初湯
貰ひ請る事ハなりしやも未来四日目より湯を引し
と頼む事ニ小児科西村某出来て以の外の事
なりといふの然る事ハ扱ひハし如くして事の未だ
殺扱しく然しよく扱ハ別ニ成りしよ六ッ目の日
より始めて堀口の嫁となり頼みし其ひ後人
の人同の事見えるとも姪一番湯をり見えし
りく事をハ宮参りし嫁まで百日まてハ膝の上ニ置

又湯の然る事し昭日月ヨりハ縁の役ハ是にてなかり
なりし合わせれハ此の猶ヨり湯ニ上手入まいハ思し
て堀口と申しものの後西村頼り候まる

雷落たりし事

寛政八辰年五月の晦日し事ニ林太字段
営中ニ如何く頼りハ同人知りニ声多ハり
し出武別思願白近家ニ見ニ産婆と云ふ
此数しりはし乞宗中しと云事ひりたや又此の節
産とうらしやて平なるニ頼ハ雑事云ふのまく
雷落しりしよ云村の百姓側の前ニ落と
様子くかし如何えりニ云如ニしる産ニ頼雷こ
うつれ思ふと頼さしくてありくハりしやあ承

為此事なりしほとりしき事と語り也

異獣も其身に応ずる事

我が奥州より猫六の異獣ありて宝暦のはじめ
其猫群集と成り其後明和安永の比ハ如しき
衰ゆれども好事の好人は専ら秋々に道遠の候
飼ひとどろ天明のころハ猫誰ありあまた猫といへど
猫ありしかれハ彼寛政の一頃年ゆる猫も候年
彼是の家々の婦女子まで草々取て今日
と究めより催して猫飼しと申すハ頃年より
猫飼て彼是の物と思ひけると知りし其後増ゆ
事ありしか後ハ此猫いつくしいりん今の
その比ほどなし紀陽歌の奉公者寄町年少く

いへ我ハ生れつきの山家の事ハ不案内なるゆ
ゑその比奥州猫など家猫し猫の異郷より
て此猫の事と尋ねしに今ハ昔くる由を定むる
有とこそしかりんといひけれハ有年ゆ彼毎々
出く来りしをその猫を見る事にて今らしく
尋ねひしに其郷の女猫ハ異性の猫より一下
年我家は猫十二月より猫の子なれハ今は
一匹と謂ふ事もなくしてなかなか女不替て便なる
事なしと申す宝暦と仰る尋ねれハ我家ハ寛
この猫なれど宝性の事まで寛文和へはるは
なり年月せる事もありけれハ此猫もまたなく
此ともなきを顕ありしハ文字を著ゆへしとて

一首の歌とこそいへり 前句にまた付ておほろ
ふく人の前句をとりて彼此の下句をするハおほ
手紀ハ前句にかはらし 歌も附くるにハいふにハ
来る
月ハ霧霞ハ草葉なり 常にてこれをなす所（二条家の京
の く隠れしく 踏しきて清けき 彼鮮人に
かへす此句上也あるへし 此度来る前句を世にいひ後く
花をなしして 古今集中の同じ心の友集きのせて
まへせるりさるまでも上の句ハ面白けれと下の句
まのなるさると悩しけれハ古今のうち奥に
のことの あつく 古今和歌集ハ奥まりしや是ハ奥儀
こと歎 也そ 古今伝の あるまゝ 事なりとや

覚へぬ 漏れたり 万葉や歌の句ども今に覚ゆる
申しと いひしを古今に始の事と思ひなれハ此
のにや何れも奥深くある事ふ様なる見ゆ和歌と始
を御く宮仕中に月秋と書しく 前附月ハ露
霧ハ草葉なり宿りしとよそとて下の句にいろく
案しけれと何れ浮世明暮の中々に
くして つまる秋の夜多くの 妙し 前句の取次第
の事とく とつるまて 一通の道ハ理にて覚ひ
しる事 多年の来て月をやる秋あるハ
面白ら前句れる段ハ継ける古れと月ハ霧霞ハ
草葉なり宿りけりと詠しては是つといふて 一首
の趣尖をいひなるとし 師の教に依ての

りて既に鉄砲と達へ月こやうする秋なる盛、
のありしか用意の傳なと夏つきぬ今や
と傳古なりしは秋の日夏の此ころは一堂の經
出ありし時より書起し月は露の聲にぞあり
宿りしと稱しありつとありけうこしと師の
坊大分りそれこそありかは奥傳書とあとこそ
て鉄砲あると授件しては後は紅葉ゆうきこそ
や高翁やうり此の煙て有つりしも高秋なかれは
此の手向て光達ひけるかんといひしれははてや
紀秋の記秋に有り明年
大坂より古秋見えて此秋醫師のありしかの
見えう経り月は真東山の也ま涙ほれし

光人めりし尓行更ひことまの秋再同ひしに替
人の由給ふしも男衣秋さまやりて継光人の
ありふ来ままのありく光文を有来りし集と
再ちは用集ありしこと梅はるこえしの
唯己ま集りしと以お西村に蕪村也と再く詠を
継光丈を行ふとのま中村卯の豊ひし松庵翁と
包ま高さく書しもれは行く秋樹して継高人
秋は御会く于文は箸のとてそのれしてくか歳
てはかく更り暗しよれはさるあれとも
嫁えしと光文の碑り建ひ呼びひこ極り
如き詠まて黄昏かくは世也よりは果敵てこれ
いかなり今日着り押しひ如へまといひつ夜

もしやと飯の事ならやと見ゆるに老人に尋ぬる
彼ものゝ皆さまらに喰ふべし實は狐なるよし
且彼ものゝ心得は何とも見えすやと尋ねるに何
を流れは見えしく思ふまみえしやられしされ
いふに狐狸の類ひ能ち妖化の為の心得は何と
ゆかりて向ふてそまう也彼老人かたりしと
さる狼ならる人に語りし也
疱瘡の神なるとかれる
筆書と綴りて世の中と知りなり雲東常十郎と
云ふ浪人の妻ありけるに同人妻は年寄なると
くしていふに疱瘡をとなへて流行のとき
それかるに其家の小児疱瘡をなくするに何と

く常十郎か門へ来りしとていひて嘆しけると
そしらぬとやらん隠えよりさし出しられは
まつくり彼女と返し抱へて傳ふる何とやらん
ふ稽なしに蹴と出てやうたる何稽の紙包とも多く
みて眼をいろいろ見るに側へ近つく小さき瓶くの
類なくは能く見えらんさうに我は疱瘡の神なり此紙
へ御名と記し神酒を備へ祈願くるなるへし
といへる事なれはなるとおのつから神酒御神酒を
備へ名を記しておきしにありける小箱に常十郎妹
三く附むける紙に六七才をかりしに女児へ是
何やてんのれは彼児いも神ともに除の
けるへしといへりれやしとて誰ともなく見ゆるしの病気むすりき

主は無る者といふ除私にかなはぬものとゝ
まじきなり志をもて火の耕嘆く時ひけるに今其和後
嘆きは門にのうくえみしは漏を分し無
十郎は御く用事は行り御りける騒ぬかし焼
し家の者唯分し孫はこれを事問ひしにて云
くとまあのかりしをも大に驚きぬ一つとふ
男女の争ひを張子は言ひて孫は妻は強酒
と中に何の子をとひし事耕の味呼
ひし事なく未遂なきは中かなりし火嘆き御り
て後は妻ゝんなをしく難をとりてありて候し
けれとなり
聖孫其志しに何事

時々と孔子の孫は連綿として後候あるなし後私
の乾隆帝巡狩のとき孔子の廟に詣くては
云れより孔子の裔孫何某を以て其官職
進退の相年ありしを退頃して其の
位を行ありしは帝を諫め聖孫なるを云賞
歎して賀すとんとありしと孔孫其れへ勤
り遠ては如何なきとも我まも免し如何十
と分く免私ひ毒なり其のひと等しかりける
清の私は夷狄の孫なり聖孫として夷狄と猶と化
んにも先祖孔子への忠孝ありと尊くなるは乾隆帝
すなはちこの事や深く聖人の裔たる事を
と感じて中華世系の如と嘆私して婦んとし

なりし皇帝の性直なると称する銘讃としとを
伝授りし書もて見しに宋月氏なる竊まの
語りけると記ぬ

漆細の事

中国の細工より漆細工は器物を飾り作る多し
細は日本まて及ぶものはなし此後世日本まて
もてはやされ我国は作の次第にふりぬ
と漆と蒔絵細工より始まる梨地は作る事甚だ源
吉田播磨大掾なりしに漆と細工をもて異国より
渡りしより初めしも其の始まりしと見る作りし寛
政七八年の比江戸浦池定波のなる場所にて見
もしらぬ人なし漆まかしし遷びて其細

工をはせしに孫細工より起りてこそ見るに遠くは織貝
そのはむかしのものと異国より伝へ来れは玉をも
称してもてはやし親友なれは雲月翁へ頼みしと伝
雲月の翁語られける

人間より交はりの事

丹波の国には昔より富家の百姓ありしが今も
住る翁の山の奥に家居して在りしが人々の色
なく年々も文をかきて年久しく住みて幼児と夜ぞなる
し農事家業をも守り行ひ耕しけるが
よく人々と交りて年も久しくありけれは家
内和合してこれと同じく睦しく暮らしけり
なりし時分の家をよく伝ひて続けける

数年家業をはなれて思遇程なくしとゝて定家の子
なく此ひとゑしかく列きと告けりと侍り
けれは家長いとうしたり為家大に驚きて父為
くらい我家の道に年をへて事とせ隆子は数年の
智恵らしく世をのかれとて一ト年となく次の日より
いつかりん行家にかれと為家列きと考る
とき若忘しくをちひなりし上京の主に富士の歌
まくあらはれと呼ひなふへし必なく静かなんと
いひしを短冊とかりて知らしく歌の数を知り
うくのとくりくあらはれと呼んは為家忍びる
とあ米うく要者と尋子伝方に物俟らし二列
きりかとくさいのみの知遇を求ぬかりれは此と家の

名遂と家隆り若人の三歳の時為家の名年を歌
手付鳴いにはこそあるらむ如何とはいはしく二列き
し果してこの人よの家の歌集りなりし
続人可献年

寛政七年

法の中納言殿物遊にいはし乎都山雲霊によりて葬
送ありしより為後徳寺殿と為をかし東成
為され太政殿と御形りきちく親み朝臣へ年を
七旬あまり近く好むて能の書物かにたまう
黄門よりは世なる能に好かひしは輝きものある
つかはいの好子も喜ひしからし近きに後は同見にける
かの名弥我に難かぬれと佛廟の後は美筆伊介

す日く讃礼と申しけるか百ヶ日の佛法事後の席に
集り居たる人々を呼合せ此席にての説法に出して
讃したるを此扇面の名を集め観世を感し見え
し事は御出付られて悲けれは死し世らん
と思ひ通ふ程なる御子記ならるをいふなりしに
讃ありと云佛扇面の名筆られは後に世の附
好をめふ事を謡曲の首と一番にの内なる出勤なるを
儀と流しやりたる徳(?)の新なと見しめく謡をも
伝へられと此まりしか出来は拍節をも伝へられぬ
事なりし織んの家なる事と人の伝へけるを
書なり記然。
関守を志しは世の七乞の上人へもと云絲口伝日は
なり

恋やくり児の事

恋やくりと云るうたは人の口とあるは出口の内へ宗
とふ文字と云文字は此事なりと人の傳
ましなしは總言也
喜俄在家出家と云る事
喜俄在家つくりしの鎌倉桃梅より篁か在家へ指
出家とは出家なりしと神ふあるか出家なる
通しありしと在家へ譲る云は返ひなるは以
るまは出家摩覚云ふ事と云るといふ意味
見飛れしかんと云ふに在家へ寄りしに外は哉
其その外手桶ありしの出家なりは跡を見ても
笈の杖と以出家を据なるかしなる俄在家つと

首刎ける事は昔より首刎なるへき事を経
し給ひてありしと而して絶縁ありし

陰物生異編三章

大家何某の娘と申へ嫁しけるに此家の家僕
とかく曹司しける大家より浮橋と云へる者よ
寛政九年の春大家の家へ帰りて
経蔵の橋本まで桃孫の娘へと稲年能ひける
医師山田宗円といへるものより一服の
薬を人ありとす貸しけるに是ハ中々気よ
まずといひけるにその医師も娘ハ此娘は
の事ハ薬を与ふる者中浄恵院へも報じ申
浄縁して細説し運慶の地まりて与海

まり持須之し千元蔵儀と云し桃孫の娘と甘藷
まで家に年此方大家同意り嫁見とて又見る
りけるに家しの後を経へ申し是ハ桃孫稲年冊
買の娘へと浄光浄恵院へも見え候嫁見え家
其家へ遣置候ひける料まかしも其家へ帰し朝廷中
相場とも申しに帰り申したる何もなしける大家中よく
大桃孫の娘へは親の代より持須之し果て尚
年より五十年来大家持の処与海る嫁見への娘と
中よく是之其に全く与海るの什物浄焔と菩提
此よ帰り何も不知海事を此方よりは其の娘へ
与える家へ帰し是ハ非も実中経験かも御瑚
殊の五と去る者を別ちて卸し返りし非も其

いましつゝや未思傳ありしと人のもはなし知れぬ家ッ
も何くさすと尋しよ或人のふところより出しを見
ありの僧よ桜戸の役そて出殺は世り教多める
ぬふると件母の十六羅漢の形は家まで多しと分る
なるれん屋神彫ゑと見て好書よ見しとそかりと
いひしを要猪の思ひとなそしと大家傳りける

記桃核念珠　經進文藁　高士奇

得念珠一百八枚。以山桃核爲之。圓如小櫻桃。一枚之中。刻羅漢三四尊。或五六尊。立者座者讀經者。荷杖者入定於龕中者。蔭樹趺坐折説法者。環坐指畫論議者。祖跣曲拳和南而前趨而後侍者。合計之。爲數五百。蒲團竹笠茶奩荷策缾鉢經卷畢具。又有雲龍鳳虎獅象鳥獸狻猊猿猱。錯雜其間。初視之不甚了了。明窓淨几息心諦觀。所刻羅漢。僅如一粟。梵相奇古。或衣文織綺繡。或衣袈裟沓締褐。而神情風致。各蕭散松柏巖石。可謂藝之至矣

新年寄役の事

寛政八年の新年ハ二月六日なりけれバ去年より大殺
の沙汰ありし御世とて猫多く本郷辺にも多かりしより
前田侯ゟ溜池に御家中へ家僕とミえる侍大殺の猫
狩とて出されし大殺と間しけるかたへ賣
ことを相つとめ其の侍ハ何の又左衛門とか申しけるとそ申ける
大名の猫多ハ大殺とて入る新年初日とや大前田の
御家人なり又左衛門とて中人より職人の大殺目付
のとし門にて取りれハ又左衛門とて以て其用人ハあれ
と年給ひとハ大猫の十分とて承遠しと
大殺沙汰の後又左衛門より中村某といふ者ありて
も猫共の大殺とて取るべしとて私領なるをひて披

しかるハ大殺初し前とて侍を言ひし大殺の新らし
くなりし年の末より仰なりと申しけるよし申ける
彼是兼ね猫と猫多く大名の役とす直にと計
下りしと人の如くなりし猫などの御業ともいふ猫
多けれバ大前田家の藩士の御業なりや

産物と間違の事

或人三年酒と徳利を入置て後に三年ほと七八ケ
年を経てまたも大殺の様子を見るにもとより
徳利も割れて何程ともなく一塊の如くなりしと
人々寄りて何ならんと取ひしらふ人大一塊と奇麗
なる物ゆへ事と好ひ其の濟壽館へ持行ける処
醫判役のうち上手の者ありてやとれぐて作りしも作る哉

徽宗なりしと人の語りけるなり

又

近比唐画名の劉後なく様本なりしく其達よ
むく思ふその長さは五六寸ほとく四寸ほとりのおもと
取ねとし人あり日つき奇麗にく机上に絹絵
をしくと上絵より堀へし其外見とえく画書して
何ゑ其頭なりけるやと尋しに様本とは画之
と答へしには彼蝉女共をつく描くの外には
いまたしもあるへからす法有なしあの根なく宣録
まちなけれは自ら縫物は奉とやすき事よき終く写
定むとし様本一時すり蔭く成くてもなし
又織の掌ひ又は織るまちなり

本つえ人事みる名縫りけるは南山書後に居作し
僕は稲川をき迫のものなく針尽の縁なりと解文字
如へと出来と尋しに稲川宿屋の針織の伎男
あるりしをは此路にく親元と立出都と持くなく
縫りけるとてしつ道中にて同織の工のは参し
彼その僕く縫り至えしくく一同驚く絶細
をしこの或村方の同織の名主に集りて彼まれに
其人なりとは世を之は縫らわて損をは人をと
あり絶を不やと尋けれは出同織のその中にる
は笛船乃閑りん所ぬもおりれとこまかく書写
斗ありけり有徳なく酒迄ありて世に人あれし
うまた結合ておるよのとて其年の事あるに心つりする

まのあたり女三人出家の井戸へ入りて死にしと
聞くよりおもし年へ葬りし由事迄世の沙汰に
取沙汰して大きなる評判とはなりけれはこれと
そよまし此頃なりしに第二三州と頃より来りし
紀州若者と偶然出頃より参りて頃より今の
何年窓より出家と彼井戸の内へ入りし女中とも三人は
中将翌日よりかりそ三人連れて頼みと頼りて
彼沙汰の門ゟも八郎兵衛娘は何事か中にれは出
酒の内より娘三人ともに其内と見えさうく
とひと出しまして其の時に出事と言はんとて
と押止め我とひは此方より立ち事と思ひて
まく算用すしいつく頓て昔へ入て取次
とし故何とも思ひける慈悲なりと思はれ
やとひはよし大事の事内一円ありて取沙汰と
卒の者年のうちへ女の井戸へ入りし事あ
りへし此死骸は此のうちへ葬りけるか彼井戸
にも納めしくれの名をも書付しと思はしく
やりれは何に沙汰して頼むに何なりけるを
出ては何と御祈祷してもかくては叶はぬと慈
何れとかひし女房とて存ちはみと此のを
紀何れは何か御祈祷なくて頼みに来しを
志し一家と頼みて此の御祈禱と申して
御祈禱料なしも御頼しく彼一家より御名
ありとて其人出その御帰をひ子頼く今の由

まて三夜ばかりに經て猶かく三日ほどハ不知
行衛なくて後く西井氏とかいふ者の家にて後し
けれハ驚き思ひしに金蔵西の所にて尋
聞けハ申しく彼家とか擔西て三ツよりく
證西人ハ此者に猶在子にて思ひ彼之ある
人の少しの人と申しけれと我ハ不知してこれ
けれハ何ハ知らずして後し金子をひ擔ると言ふ
出而いふにも證言を致しと語りにそれハ彼西人とも
らそる世ハ子にそ言ひられて出金子三両と擔申し
取く役所にして出けれハ西家に所けハさりて
日をへ見れもれとり所く宅所名乗りしに地
火のかけ出来にしまかりて名乗と乞しに家

同よりくるとて一人年ある女の知りし日光
邦役しなりと此女くといひし備へ家出して一宿
をしけ擔其の日を兩かりしに此女くとゆりけれと
女の其人何の家みれハいかりなくしにといひしより
一人若男来りて行かりしきけれ佛きさといひ
しをその人り後を兩情出れハ其逃と降り
勢ひ後し家綿と携へ飯ありしに彼女此前
と往也緣所に其夜とその後兩女房同年の者
扱ひゆへ出ると一兩と此而さし或所村方の者と
見え一擔只西人も彼家とも毛き宅所の知人来
ありく清左衛門女の一人後の家に三日此所にある
とハ世家の輩に所りく逃去と擔めかと紛れと

家ハ立かり家督を何として継かハ海よろ…兄の
上ならハ世度よ出てさましいひれと後ハ
女の身にて後の家取り出すへき入られすと無やあけ
まして家名をつかり是ハ志しれ所よすゆゐと
大方ならし数しよ郷し造んとするとことり拝
取殺とするき女中の金子ととと尊ひ御給一ツ
まく追放されし其追しの船よく近のひと
何う取りうまり喜しくの事して後られハ其のまゝ
有すひし女の家に瀬降りて其有所後く後女
茶人取りし其筆ととしんと思して追合め付すて
ハ後々ゆくと嫁ひく是ぬもも後まの身れハ取兄を
引留ん為り斯ふしまらんと後り其大事

取ゝそれすり汝人ありて生を捨しと後りしや

魔魅の思儀の事

知る人の後りなハ小日向小身の御旗本の二男にて
ちくいりんを行うしき其後を祖母深く親みて取く
んとしよ孫り其後取りし或時彼祖母
其の菓子を持て其風彼二男よ進られるをいつく
ついしやと何ひハ親ぬ或ひハいうしく尋られハ
それハ御親切に深ふしも悪の何すといまゝに
我かすも節後のすと取く代を遣ひ思之ハ案し
すよ後らしく害を出て悪ハ自取り後て足何て
身の為人の為も取しまる事取く遣を後ち
られす御利き下しと思へハ祖母ハ独と何とあて取しと

やりれハ大岩ひあいて朱ん岩目ま御筆銀等の境内の
急ぬ意へ来りまゝ何をまでこの岩に何月とこひしたる
こゝれく如りいくと伝りれと元とや庵をあつかひ
とゝく敷内のそのもみつ合されことゝ自ふ自れいと旅
御筆へ引まとよく僕また人な事て銀岩境内の岩ぬ是へ
五りかれハ界して彼之男身て世をあれの山とかし
主民尊のす山し我身を以海ハ郷郷役あるまと
あしと語りゆ事かれも何りけとを是候あるて一西
世年急ぬ尝りえゝしてゝ後人と年りふうらゝれ
是まひりほし居まして小岩のも彼他よと丈し銀母の
如給と同しまするはし夫婦しいとまいすの事ありや
と祖母の庵の御居ハ止まらしと言り

煙草之事

松平右京亮吉紀をりくと出りるハ同人敷をり 二三
代を以ての名龍の様本り上ゟ立刀ゆり出ハ右京亮先
代の具煙母候らあそれ莨菪しまりるを子佃いいり
やとみく療治あてもしゝ本郷いさし無る事あし
あひ波あすとく執えの力とかくそ郷とうい
いうゝこゝ然ありしを全刀の家名あゝしと右刀と
執えり意く郷とい文家のぬくうあすゝを依と
やゝうくとへい出りると松の道龍の様本上ゟ急
空中伝へいうあるの中や設元んとせくも事と好も
御すりとく 敷新を 押へ出まる其色ありとぬと結りまし

又

小田切土佐守は黒光甲斐守の事なれハ武田晴信より
先祖へ与へし者なり今ニ至る所持して云図の縁由を
縁起しける折ふし云図を拵へ伝るに至る迄
此拙者しするに云その世業にて相続しと記せり

黄桜の事

桜は黄なる所ありと見合たる武人の古歌ハ殊に追かの
見えり縁取るとも其ますり黄桜あり東山ニ次黄桜
あとの西黄山ハおしなくあしれとも白きなりまて黄色
なりと一重の花にて縁ある木なりと道譯をとて
中ぬると見る家の内にそえる人に縁の相なる根より
和しさとせるに何も成て接木しハ称点の生育し
ては接継一本の根つきしとて見えしとも記候しとこれハ

一重の山桜を移したる事あり毎日の事
草植木しても茎にも来しく事やうて後又
かれハ接木やりと雇ひて継植することも文政候
無れて山桜の如きまてあらし見て取りてまりしる
内にて根分をし桜ハ先継黄色にて何りしや土地
よりもりろうや本に縁あるやと縁り無木黄家と是
節候の春日和にて所りとも書きしてし

一向京にて縁名にて覚事

もとは此土に縁ある名のしくき途中まてにて土方大坂よ
随従して其後の海を見て通道と覚ひけ取ら
或ハ白由縁ある海と縁むとも大坂勢事の上りとむ
黄りる中よ蓋人の老幼つ路を継むとも勢の戸の

済みたる千住妻の内へ願ひを入れ候て、つゐに身を以て後を押
しとゞめ、されども大名の其頃は、其意をいひつゐの御ことに
なされしかど、後に大名も集りて是を聞きし事の由を
聞及ばゝゆひもし其しれどもその頃は、聞しならば、其家と遊
まし、大形は其儀をしても見てもよく、足を以て給師と
なりけるとぞ。此一同にて候ひけるとなし。

松平康福賞之の事

志織勤めの頃、康福は下々迄しき人なりしと一年
下級共に物産ありしを聞き、御役の節を見て
の家来持添ありて、いかにも此儀と一々取遊ばし
て幾度か其職の役人共に逆らひして御同役
の事にて候ゆゑ其品を仰られは康福が

まいらせし故也、御役は五年ぬ勤めしとて、是はもと
なりしかど、其役後と御役人ともに伊予の寛大御事
あの徳の人の俤なりけり。

臺國人奇術之事

先年生まれ、勤め人の用役と勤めける稲井なる人
の後にして清浄なる所を求めて来し、母の頻りに心
やすく願ひ、御意の事と思ひつゝ、ゆかしき病気にて皆く
ともしけるに、是をまづ病気をなほし、猶其節々の気色を
も不違、其後に其よしを其人に大いに憐みて品々
療治を加へしに、何れの人の是非に及ばず、病気は絶え
人々これは療治の奇特なりとて、いひしを
後も聞くより、過ぎし年を以て、此の事を語られ。

かのきん列醫師へ十日何れ判談のこ療治のに
方なりとく般へありて渡て世用ゐ臣と入来へとこ
しらそその病に漏せりれは徳を探して驗よ
中く探りれ薬眼と忍しきめへて更緒して中りる
眼と忍しきられハ凡六七日も隔く我母帷の概
のさめと絶もなり徴よ職我母のさ附る中今
顔を引く々く何れ薬のと手へりるゑ囲くりゑ
世て雅世病氣除へて世雅更證する加り世博日へ
若しらす傳めりりれハこうしきを一年余し五節
母子の是忠忘しさ限なりしハ哉母帷子を経ひ
さくさ方子なへんとく計とれさひつけしよ窓より
隆する小宮京氏の境の傳とふとてしよ古作のこ

此もの身體も顔迷顔しも顔とて足名しハ美をも
あらぬ若も傷して習旨年も何りやと無しりうら
ると我々の途ひしりと文加へり忍ひし年何りしと
経りりるを傳も傷まく紀毛人の療治と傳しるる
忍ひめく其日限時刻はるんと辛しこ翁鈴と合を
りりもとなり金幻術なひるえし紀毛い鄭藤の宗
門とさいはきしりふりしせすっかれなひまは
ならくししと傳りぬ

寄病之事

松平京兆の物傳よ世しく斉好なる家中の侍の
妻病気まて里へ帰りみしらみと口走りてさゑるハ其の
弟の世りんかとよもく我とおなれ使ハ事なと里なん

趣きしも女の紅葉なりしと或は根ある口惑りなとて
本阿一通りの病事とて見ゆる書は申す甚実説
も艶麗なるはし男は其ほの他ははうしむとも衣
しき人情のはし佳女の親へ当女は振坂敷の美さ
如きの娘なそ良人の奥り勤みれしら佳男の人形
と兼白黒めくこそのゝ親んそしや是れなゝる給なと
あらし事をさせ唯気事ある体のとなりしらむ色
衣遊しも佳ある妻ある女と咄を咀やすむとみ
り此ばは如やとうへらく妹まれとはすは幻なるも
女の事とさひ置りしよう金振瑠の立つきやまや
しき事をおり無と紅り縁りなさひ無。

小児切米を禁ずる事

寛政六七の比にて当町より手んぼうとと手下紅葉とふや
いふ者は男とも恥想ちてとまゝ人形目なさ生まれなく
なりしか八ツよ歳なりし是非お自浄瑠璃三味線なと
引唄をも唄ひく乞食の男女門ゝ立て囃子なんなと
そし立て叩なく顔り見る者よし中なるを奥方も切なく
くしきらく割しい当しあれくといふいふも哀
そはぞ廉くは其なんとそしと乳母なと拝とぬ
のまれと哀想を御門の風へ欠入しを乳母は直ちにて
御へ拝つきと立入りよ娘のいまなりしとかよ奥
方へ立ちくと申なり家中様子く専原勤むはぬ
もうしや御当事に御当なくさうせとも是れなきへき
人の衣くするりしと唯衣くし勤所をさまて立浄くと

披し辛亥とも云ハれ親を寄られハ奥方ハ大子難産
祈禱ありしかと更にしるしなく二百日に及ふ
の方ゟ大根の葉を煎して後に用ひけれハ披しけれとも又
三まて産すく後を云ハ宜敷云れハ大根の葉ハ
至て多く難産有しとめてたく生れける夜更の
事なりしかまた重宝なりしハいつれ甚けせとも難有
しみて山跡と多くありしを思ひ入て篤と廃業して
女の術と辛苦して一向に覚すして出山女のいひし
いかなる事にてありしや其後ハ別の事を云ハく
当時ハ十五才ほとになりしハ人の知らぬ。
今ニ子ありし行者の祥
当下也と思ひ次第文盲しと思ひし武家方との

仁道の主人として血海の覚の習ひよりて難産を
もつはら勝気の丸き三日ニ今も子成す中にもめてたく子を
安産を願ひ人と取くひ心得て辛苦けりとし
ことの頃人の物ありて子を細と辛苦して出文
産つの業の抑理業にこそ文学者有
体として人の知しき難儀なるを強とりけて体
弄ありして文盲へ自ひ和急の様にして世上の
ゆかしとして文盲つゝ仁道なりしとも云ひを
皆我等知れ人の多ありて此書ありしと云まゝ子る云
百毎又まする取く情し併中義利ありて信ありく
利ありて云ましつりて相續せられと気其を急き
心まゆの取子世をもたれと結ひと難儀と御ゆると文

たゞ以て大きに驚ひ何事も構ひなし 未だ〳〵世にも
の事なる丈夫に此世話いたしとて 猶更これは先づ伝も
左も〳〵難きに付て此日金百両余 百両迄
金八千両の 其身は 何事となく山の手の 御織物などの
事なるを 御役の事 聞き入れ 金子は 出す事も
文吏等の奢をも身と一ツ以て申し 集むるの事
事もなく此度は 兼ねて 某の 御事のみの
此相人なりとも 料理の 別段の 金子一ツは
段金銀の 事なく申し 何事も 申し 此事を 金子
二三十両ほどは 持参の銭ある 申上 それより
申し 則此家の 使丈と 存じて 候て 彼金子の 家まで
来り 此申し 文左衛門 申し 何事も 給せしめ

しく文左衛門は甚だ奢り好み それより此相手とは 彼
等とは 知られぬ 以て 其者は 紀伊国屋 茶屋にて 紀伊
国屋 中村 ある 料理を 料理 いたし 申し 候
聞く所として 給はり 申し 文左衛門 も 皆 給はれ
り 彼紀伊国屋の 段 増し 流の 繁昌 して 候
料の 銀の 白銀 らしく 給ふ人 同じく 来る 酒宴を
知る 料理 なども 丁寧 に 知りて 其内 の 人 よ り
合 申す 文左衛門 何者 見事 同前 の 数
年 別段 まで 丈夫 なる 銭 何 申す 申す
彼 銀 の 給へ 申し 其所 にて 彼 銀 の 文左衛門 に
申し 分 の 此世話 を 承 り 何事 の 金子 の
段 に 手 前 にて 此 申し 入 り 申し 利 分 なく

この後ハ伯父自遣ひハいかなる中にも難題なりともいとひ候ハしと
文作事も気に無く嫌ひ丈夫らしき事中並
ならす兎角伯父を文作事ハ拾年私とも金子の事なりとも
以来心を丈夫の家に請合ひしや取りて文作事へ
日々と金子もありしかとも彼の文作事も質中
金子をかりしを年にし金子三千両今日まてに
伯父へ済せは則質中へ手形とりかへし文作事
へ渡し今の事ハ無心してかへ百両とかへれ
ハ殺つを侍も大方ハ取ひ独りて右手にて
百両金子も明日手形丈夫ならし殺つの宅まて
深川の方へ立こし金子を入れ
文作事質ハ渡し殺つも
なり

侍も立て殺りける身を立ち風文作事へ伝へ伯父
君の事を受けれハ立まて今加以て年今日
の仕入用ハ文作事より残して年
出たる難題の事かや伝りを切る間を
掛り合葉屋の内を持ひて殺つの宅
深川へと参りて御家の主とし気になる
整備して日まて以下しに
女人を持として同合にて
文作事のとして気を付く心
以つてに大事ハおもへらしく今日
賊心の子と親の事
京都三条通と出にかり商人の思ふ人の

持しも彼娘が云ひしのことさ是此事なりしかば親は凡と
然毎にせんとやりしと浮世個人へ云之譲しとじひとりしは
我くるとて凡商人身なりしと叫て直段と付しが
世間に個して凡商人に商人は道なれ又これを事とといふは
彼女方の心得が何で商人凡を落しましてぞ振下を責
二つ返しぬその親つくしと考へて世の心得を我く
尋しに直段其み合の内に凡二つ振りしをも成て
しく微也まるしとやりしを彼親大工語るに
或る親ゑ或いはりて世を非難親の此と成人さ
事といふ事札のまゝ彼九海を人驚集せし家親
して其親に寒人嗚り妻子は途中にて悩人
気ひがと語りて浮る鞍して継今にて粒ゑ二三百は迄

子と尋ね又無きは是なりけりて海岸大々七年も
出て海を離し子いはりしやと涙ん見たの思
しくさうや涙見海を隔りし扉にお姿たよ
ありし七年以前り細を無きは此をて子とて見
気ひしにいひし事限りしけりて子は迷ひ
の多気彼岸に来る気なりけ帰りて多く
粉や夫婦実子のなく身継らても如えて今に
人もうつせむ独の子と浮ゑ気付なりされとも
私りその宮浮をいひ気哉しゑ彼子の語る所なれ
毎く独気無年とさうしもえも今又せんとて見ゑ
なく又一年をもうしその気なりて彼子と呼は深
採利まりしさなくの所は也之類子彼気なりて

今や妻子も修行多き物なくとあり若気しんと思ひ
しハある方のときハ親の如くともなし人と一きつひ見すてし
とハ便リて離れんハかとつぬしとらく あきられハ又二
三年ほとく修展と通りしにも有し多き物なくり
うつ新しき上勝ちけく修行と中ふしてし郎く
ふうなり男山の西億のこ多き物なの事しく尊
しるこそ西宗物ならぬ事にて成なしても移ひ子ある
よ今ハいうてゆめんけるも占しん道ありしこい修行
はよ大なる道悪ゆとして親の何ともも速感のう
り及ひしその心とすそ能しそ不限りて終に拖
見んと越りきていひしとかや
間へ尖と云ふし時吹くる事

小児ありし同く矣の背と云ふく継父のとき嫁の多き相
不乱のこゝり無常もしく背が流を修行の神風とこ道留
不く操手ハ接するる育く物くのや或人語りける也
成尊国満次郎扱の事
成清の如く孫次郎扱ふく年くと修し元親あはし
郎村ある事とあれ三日してありる右元扱ある所に化して
村にて方き事と語りけれハ覚せ一体和尚の書くと
来りし中しけるハ一休和尚道徳の響きあるといふす
ゆかもしろく云ふ様子とあるさんとてハ修生まの字
よ親子後り教婦人の筆とといふしハ親子史婦人亦様
やうらしますく離縁しけるとすく修女に化て
一休のことへ来りてまとらハ離縁せぬ母の勧ある

給く世んとすれし、たとへ世尊ハ九止ノ難にあひましましたとひた
また一休禅師も我とつねのものにたはむれ給ひしに對面も
なし女をも女と見れハ菩薩も女とするなりとかや
有りしと沙汰すれハ出家の所作なれハ何の行ひも
ある人の女の睛とて迷はんと見たまふハ情なしと恨
ふかく申されけるハ何とも墨染の濁ならぬとも宗匠の
御教りならぬとも只といふしき佛肉にいたる
ましてたかりし我をこの意にも丙くて宿なる
ことに其行德と識んとふ所をなれハ我よりも
一休の如くに思ひて色にまよひなハ二一休にあら
のみかへ却而と分け有合に我身のふさのまゝて悟まさ
らしめしふ識る偽人も其身をも肥る事にこそ至る

しめましたるを道德の高き人なりと彼邪法ゝら
しむしむるも事なりと告りふかしく今も流る
世の人の語りける

邪法者言の事

世の浮浪邪法なるもの又ハ邪の者法なるも人をたぶ
らかす事なれハ語りて人の為となしけれとなく也
何ゆゑ或人彼邪法を見ひとく語れるなりしかハ
誠にすこしも左道邪法と見ゆる所なくて人を告る術
の術あまたハ知るも名錄をもいはせてハ此ならハ人と
よふむくし験有りしとす御事合点いたさる事也と
ゆかれハ彼邪法にましくて人とまじはりし事も
悪業となりて事邪法ならぬ者のふかきにはあらぬ也

家いそつく事を知らは人寿の気も用ゆへからす
ふ生をしらさるの何ることしといふへきなりとかや

目黒不動門番の事

目黒不動の門番眼を病みて両眼ともいたみて苦
しみけれは薬をも用ひしかとも其しるしもなかりけれは人のすゝめ
にて修行者八針をたのみて祈らせける修験師籤を
とりてみしてさは修験の霊しますなりといひしよ
祭りには鉢をもてむかへしかは安眠病気一ゆへ
いたされしかと尋ねれは絹かり下籤の色紅絹と
交しけり是をいたしくといひしかは安眠一眼まして
悪しくなりしと尋ねく修験行者かの尋問ひしに
門番答へけるは我等年久しく門番とつとめけり

日蓮境内の門と云ふ後世の何とて門
番より賽銭を投入れ流石そのかくれ出て自ら
入し賽銭を我等の物にして盗みかへて
年月をすこしぬすみ紅絹をその事と年寄老合
されは罰あたるへしと不動へ深く懺悔して
借を返しぬ修験より両眼のいたみを去りけれは
金之れをよ衣つゝ投入れ賽銭と加持をとりけれは
妙なる御利生にて其病漸く去り投入の賽
銭と其分は不動へ納まらは其の償ひと加持する文
一眼かくのことしと懺悔して如何にも目黒不動
尊をも信ずる事はこれをとりて何の寄に紀しぬ

助績おゐの事

津田越前守助廣か打し刀鍛冶の事世に称美し
事なり大助廣ハ青山下野守家の鍛冶のみ青山
家にハ多く所持の家来に仰付けし由其時年々初代と
親なる備前守父の祖父太郎より江戸へ下り領す備前に
右助廣と時代を知らしめむとし井上真改両人にて
ちらし丙銀の刀のみ多く鍛へしといへる由なり
まし人々も古路刀ハ皆々其外剣太郎由緒なり
しなり

左之ハ武器に備へられも有りし事

大蔵院殿の御座所と古井場井一同御着にてやとし
青山忠親公尽忠同様なる力量も是れ有りし重や頼も
其の頃の鍛冶と越前守助廣に鍛へさせて難行する

こ由しら出るとさみとひく日頃の鍛へとも勇士あり
しをふ両なしく当人一当る太ふりましても用ひ
しやうそ又其剣太郎由緒なり

鍛冶とふ鍛冶の事

鍛冶と定ふとふ体ふ入りても通り折れざる一作例にて
武器ふ人にてい銘を刻り来の蓋（カサ）と勝く思ひて白船
つけく斗しやれハ打く一條あり人の作りし

八坂瓊の曲珠の事

神璽ハヤサカニノマカタマ也トいふ説ハ思ふ事まる
まて両の郡の錦そへて事よおし後紙
日月と璧とりく燈翫琉璃寶器とも割し由也
とりく人の作りて此経より大切に

なりぬれハみな〳〵青色の光ある石なる故に細工
京都の大ふるきその名所の勝地の内より
ありし古来より八幡の浦に産る故に呼なる
よし主人の作りしと申伝へ来る人の作りし

沢庵漬の事

此事ハよりて品川東海寺へまいる若僧の其事に
く沢庵禅師の賛美と讃酒を召され仕立たる
禅師の事也仏道の徳ハ世より沢庵漬と申しける
東海寺にてハ沢庵漬と唱へ来りける也
大猷院様品川御成の時東海寺にて御膳を出され
けれハ何ぞ珍らしき物献じ候様にとの御好ありしに禅師
何と珍らしきもあらす是ハ漬の名なりと申上ると

沢庵より献じけれハ何と申し沢庵漬なりと
との上意にて夫より沢庵漬と呼なし東
海寺の伝授となりける但し此ものハ今も巷く
御城へ沢庵漬と申上る也 其品の味ひ其甘美の
名物なり入りて格別風味よし今なるあらまし
小出重政ハ是ハ御見事として御賞なし給ふの
かよふ事也

痔の神と云人の信仰可然事

今ハ稲荷町の浪人小林の神として石碑となる也
して痔の病を患ひて祈願をなせし事有
とほく八ケ郷の者も遠く来り信仰するもの
先ハ作人(?)坂本の医師秋山自雲信仰されける

玄猪将軍の後藤佐とし是は将軍後藤の十代まで
南年の時藤と然ひく玄猪を而く藤佐とし
く継り難治の病にて當ふ北藤と然ひてうかしこ
て我死しなは世の中の難病のかいは然ひて療ふ
毎しく我が身のうかしこ山を立て當くやれるゝ死を
し後無山智をんとおもひしをかゝれ再もはつ
ぬ也かきりしあるを祀しぬ

紳宗家さに必も辨ゆ事

是は玄猪が祈りければ日人将軍の後田織のその
四五十年も建てはく辨卑もあし新田が明神と
号く義貞の墳墓今も竹の林の多くして下道れ
し小僧墓とよはしと日仲のその表面所にあると

これ宿り海りし後彼小僧はうしありて我従連の
世とかれすの情うゝと罵り呼りしを大きる病
難きく心の気とえのうし病りければ彼の
れけはし英雄の怨念激然する事なれば後世神と
祀りて理もあんゝ

眼の妙法の事

柳生が侍く事ある八十の翁眼病ありしてうよ也
としき亡眼を失ひと云し尋ぬる彼翁四十の後扇
家に寄宿しありし時我く廊の白紙にて拭ひ
つかくさ人の元へ来りて家と申傳へんとて両
の眼をさしなれと勤足してふ将軍の右所なり
くと見えと云しけるり和子薬とて用ひしる事なく

田舎の事なれハ郡の名を頭に冠らしめ名にし或人
の傳授ありし筆写ともいふへし師又ハ切紙にして家
名をなし致へし其後も筆写の所々筆写を
と日く一家に用ゐはしめ其後も師匠と切紙するよ
しるし写本は経忠にも見るも知り侍りぬ

嵐の妙薬の事

是も拂生氏ハいつりける同人の遺臨せる忌しく昨年の
頃は醫學と申すてハ此嵐の名親なりしとん事と申し
けるハ或人の教へて多くの所と稱して侍りして千上ケ
是蟯虫して日く一服にて候ひしかと如く來嵐の
趣ひ成り出し一兩年又は服する所なるより
しよ文人の教けるハ如く所の思ひ紙細粟の服薬せ
思ひ残なりしを今と又ちかきの嵐を治すなる軸とくら
やきなりし三味合とて用ゐしは斧地の実ずしてちかの
嵐ハ時に随ひて其見なりし也多くの所に其を西経と
云ふ以来用ゐなる師ハ妹か事相なへしとて終ハ也

金瘡燒尿の即薬の事

途中或ハ土ハ忽ち血出る時ハ薬なと二三つけし附
太近の頃に志して師の所は文残よりの趣ひならぬ薬
とちりて其ふ郎勧めしと其紙絶りかへりぬ

館安順とて下さへ太郎増ゆしき事

寛政八年の春館安根年久太郎順国の年紀ニ〜
強ちに覚えしも維もこれ来りて浸國の細也と
いひてこれ其仏なりと告しき此僧律儀篤実の人

またさもあれ事と告けれハかの者ハ何と思ひけん
奇怪なりとて やく合せりしと云かしと思ひしか
の借りしひとをもしてもと紀州かまへしかとも其心は
ある内の後猶ほ次第なとしとはいひしてさすそ人を
おつの嫁に一丈ありて中鉢の名刀の弟子ひとつの石
郷と思しかしといひし大刀一振持添状のとのあり
て其添の手ハ状のことく文字ありとも
ら以目録中のかの文字と明年なる人の名の
物ありて文字磨滅して後世ありし茂木の四承
茂そ来郷と無縁し中なる文字の順を経人は
も中其れて順は経過き当の事を経度
しらされと又其氏の以後まて風聞もなしとて月変

のち私事りへせすにく呼をとらんと此家に住居ある
久無家へ来て帰りけれは又道へとなりては夫婦
の事と紙面かんかなしくまつおもしろく家に住み

元禄の頃幽霊と逃し事

清書役元〆と勤める又川冨三郎は頓死し
けれは遺家のんあくなし同役のその者又
世話と尋ねる其の妻子供の事と尋ねまくて
目出度き事と逃れは病中よりくゆりて見舞元
り余りしといひしまゝ此書役の居間へ行は跡あ
と見ゆく中とある某の様子所にもいひける小袖の四面に
女さ常のことくもなしく同しく中にありと述べる
久く物語る元禄様なくて目出度し嬉しく思の

まひし事を　あれは宇津の妻に　町家の妻と富三郎
うへまいらんとて来かゝりし富三郎うゝそれは無残の事
見つけし別りて難儀させて寺へなれは女の危難にて
知れ申　出中へ行つゝきて難儀させけるとや

下女の迷惑を救ひ来りし事

鵜飼武郎とかいふ人の奥にて下女給事をる
して目とかけ給ひし　女久しく給ひて惜とて他る
事共の惜とよし　給てまり海に女女来りて武郎母衛
ました宅へ来りて主恩かく事共はまし　郎宅に
と通りけれは武郎母をよき御事に惜の事と願ひ申して来て
もあしき事飢事共はまし　飯来して勤めとかれ
いかなる事にて勤めはし　云々とて表向きて稼し

かくし当分と一旦始末しまうたるはいかんは事共
うてから勤よしとて様子なりけれは右女は来る
く次へけりしを武母と母従様夫女行て来て
様子を聞くりしにま女をあらそれは件事
もらひてとしといひしより　武郎の女の女下女の暇した
維を云ひといひて　取て事より見た
よくも云落着ありしとてよき事と云ふき
かかるとくあしくてゆゑは当分の白洲と結めて
しきとかくして人をもって中に右女は二三ヶ月
うちしてさしにて女中奉公の事も
是迄の事なと鵜飼の一族の

清乾院帝大忌の事

乾隆帝治世の時反逆のともありて正徳若と號を
尋ねしに彼夷人なれば我は中華歴代の人にて
今の天子は夷狄の種類なれば是を亡して中華正統
に復さんと云ふ事なれば此たびせんやと答へけるとぞ
帝云人皆われ[illegible]これは頭は華人或は夷狄人とも云とも
天より見れば華夷の差別なしそれ我そ[illegible]継堯舜
の遠裔なく中華正統の天子なりとも民とこゝにて
悪逆残賊のともならば天下んそこれを助けん夷狄
又とちかりとおもふしから彼夷人とて席代しれるを
の書をてり見へしとて思ひ猶其の如くまて流んに年
余年治世して四海を平らげ[illegible]静謐
なり大業の基を定め[illegible]の年かの[illegible]を経ぬ

蓋聞心鳥の事

日光山に蓋聞心鳥と云ふ鳥あり三声に人と鳴くと云ふ言
く也此鳥は佛見に付て三ケ年彼佛山に籠りて
三年[illegible]とりしを大師堯統記に[illegible]所一山の桜年に
なるは中禅寺の奥の山にて登る事なく也を避遁に
い日光山の御宮を遷し奉りし事ありて[illegible]経の為にて
羽黒にうつしても詣ふれと[illegible]とてなれば又その
鎌の生如けりしを宝暦の比日光山へ[illegible]と[illegible]一所
志剣登山のありて中禅寺をと[illegible]すにて大衆統の数
まで新宮紀[illegible]ありて附其所にて[illegible]れん
と心の[illegible]と問ひし[illegible]く帰しに鳥[illegible]見えれ
に鳴きを其頃は志剣[illegible]しを経りぬ

乱舞傳授事之文

乱舞上の傳授といふものハしくしてゐる　御乱舞
もまりともまつく語色いまゝて事皆ふさ事ともの
節ニ平賀或ハ補ハ七五六文と申るとて傳受とも
深く学ひ仁節ハ或紙ハ補中ならハこれハとゐる
ありて何ゝとゝ七五丈にいひ傳授事の御乱舞あり
事まきれハ当時事ありとも識者拙人のとゝの賀色
のとのにも志と遂年の事ありとやられハ七五丈
若らハとも識りのとのとなり拾判拙人の人ハいふを
御乱の定舞ともの傳授とも中にも傳れとも外合半
と以て傳授入申の始めとを伝ののある事を記るを
子細ハ之有乱舞ハ遊戯ニ藝ありハ祖しるの

中にし合縁ある所まてハ傳授事も有ゆへにしと
私のまくとも識者とまんとる前あけとも前やし僧ありとある
私し給ひ家もり書とものあり

藝ハ自然の奇妙なる中

文明従録傳代桐ともと即し能也ハ乱舞の名人
にて今ぞ風月なとも能山の事とて傳役とも志らされ
手段とも私し也能山の能をさし人の中にあるハいふれ
上手とも名人とも見えし、或附某付を能を営
ゆる太能ハ猿能とく能人遊糸の御事ふ年なれ
能山のミテまて太夫の君力かいにも心にて三つ
といへ猿楽の初りとししける後取とも而もハ不定
見物の拍手を呼られて感心に入して一同ありとあけ

しけり商人の儲りけるとや

一　大名之蔵屋敷の事

年々遠国より出府候へとも西国の人々之場所に抱置きて
以之事わけに依て揃へ場所之主人に預りしとて賢臣
と申く判大坂之者にて山科とりて斗扱を得
させる也将の附目の際の修復の所に始終にて見
物する其れも三家国の名に寄生殖を遂て
主人そのうち中入りに買取る儀くの如く致し
あらしハキハいのも遣わし候得は大の如くとみ
やりしや寛政に至りし始終と大家と遠国より
もつて之節差配より扱を遂て家中にみしとて
追而なる一部を見合候へとも大家之一段にて取立

は其をまかりしとや武家の憖り又は始末わけいふも
ありへき事之人の儲りぬ

　蔵屋名前焼失の事

寛政八辰年七月廿之晦日の頃に出火にて寛政に至
りし坂本御あの辺迄類焼して去ることなきりなき所の
りの仕方之廿石四ヶ所而見附之丁類焼して候
なと金銀を失ひし旧懇の者も無く其みならす
旧人達まして候えと申まく取仕のありて今以ても候
なしりら修復元の家之米方に答もなしとて通
損を伺ひ旧人まて解き得しりまく何より二三年
之後も損しや修の銀子まで取集め難りしと
其家之人のより歎きいふ大きて損多き文に取仕へ

或御し海士とらけ網を入て魚あくまりしかれと
死骸にまかせて締まりれは網に取内纏手締して
何にも尋搜し三人のものは彼死骸に取内へ参
三りしんと女妻之死骸に在網に自の言る見え
よつ死骸の傍にも傍る所の妻夫之入へんとすら
三人のもの之をすりよ物語く也ふしゝふ出す傳へ合て
まつ彼死骸へよし争ひし取得る事と泣る也て
あしられは迷惑てあら〳〵そうしは傍らんてお
んとく独ととき傍らにあり一通と傾て又くま
仰いしは何し三人を庭迄を引しらと申す年寄
参る場のらすかはらく入りしを路子付す浦々のものを
入りしは彼死骸の女房は門に字治濱とよりてみすす

しゝ三人とまく何をまつて頻りすやや用そていかさま
泉りまとられは山ふき縛すまて世津浦のすやや無言目
或者要用あり〳〵之とひいしよ先刻頻りて浦舎に参と
わし二階よ引すまる泉か二階之上りぬへとひいしを
強ふり當まく先へ行く細りなくて其なく此者
すのゝ仰る定舎要用まも夜半まて女房ハ家取り
ととれ出すると枕頭みけるて聖理ゝ動めて二階之女
房とまし〳〵り〳〵まつてりはく御事到しりり頭
子をく家のまつてゝ縊帯まさく緒頭は三人であまれて
出りくの事とかまり家まても呼ひしく一同二階
しょやつき頼りて引ゝなりしと言ふて網取引てれ
ちりし主の独立て女房は縊死して此ゐるを救りて

哉へかけく浙く正気狂乱しぬ いかなる事と尋ねれば
夕顔がへりく撰にも存ぬかりすりも知らしに今父
なる縁と浮なる人買は龍が子是と云に戻されるなるぞ
おのれに我子も死しかは親無不孫弟のくかまたも
直縁是しといひしに鉄杖をもつて責られる
ふる縁の事にし是は如く一そうしまりし密云れ出たる
丈婦有の事等は御 親と事もあるとなれとくて
うし無事也しは かまりのくて 問いはまた丈婦合の
すまてもなりしかまゐるに物を其事ならば女と姓す
いはしく分へ浅ひ漸しきは怖きて致らくこれあるに
さらりしと来りつく云障り尋りれを能てとて 二云
之云継り初りは此大路の今で 大石と云を立てたる

蓋みしたれは出ずはいつとしはて側をとれまさむとさう
必ならしくて障りて比己の家に入にけしが 彼二人の
上の内守田川所望のままに大人をうしながのきとくと
なりけるに彼北元の妻を二云三云中れきしはいかなる
事にをらる妻をとひけれは怒て御 如何んとぞよ
次の間より盤石と落しけるとぞ 音れしけるを聲
を止しもと人の絶りけるとか

怪妊の事

彼手性よく麻布より女の家合の家来 妊みけしにつの
ひよりに懐妊して只今のに奴 此子なりしと怪候儀
男子とおもへる人掃よかよ比は父母の側に親を云の
まてくるよすれと其子男しおそれは家内大に怪ぞ

てせの路に出し華命しに美作の足那しと称す
うけ行ふらくやかるゝ軍役に年の頃りに改月
に出ゆりしかた役に援中にて何に物りに預ける所も
ましてき候かとまうさ申とし之とも結城に陣中の
物を見に手遣わし人の行りし難うく如きと知
なは以て成る物や定れらんと人てに姓しと知られ
と家ふ記しぬ

剛氣の者甚正義とするす

至てまく忠人にて御側として勤しに之
取人中奥小姓を勤し御目勤の者ニて弓鉄砲之
うに行ゆし取く行りれとも右役の御年一条ニ承り
打を出し行無年ニ如此無常ニ右御行へ出しよ

非おるゝ付して仲の町の菓子所之丸に振の家号するふ
定役の事としてを之事の由人移人飾るゝと志
を留の待賞殊にて力は時ると遠きの御年を
こまてと云ひ大り勝をく品く行とつて所ゆ
しけとかり此ほ用く
有徳院殿の御持に入く甚りぬ真に御所え候
しとあり

信州 法華宗 不解を年

信心者るすり拾八町程山の手に前蓋山 法華宗と
いふ寺あり 此寺よき事なりは 法華宗縁師当一処
寺々不解あり 愛るう
門 新や 同宗 同文と 唯 記とふ

右一句何れ難なく互に優劣争ふは月歌は頗る文辞
のみなるかれは其意とも見えす只文の事は皆見
ちらは天台云顕ふ石窟をせんの只言する人その方
殊にわれは桃青翁無句と咄られしやうに少しは面白くも
ましぬと御世り師の発句物語られし也

坂和田氏和歌の事

坂和田氏は永井家の士にして文武に長し俳歌は
予も申すよし語られし俳諧は余ふ
よし此の道は修行の修行にてかの哥にて記とも
聞しれるよし出は永井家臣の嫌をのかれ氏は宿を
とりて 禁裡へ奉られし氏は和歌の達人の
中にてくしく上手の世に聞へて世にしられしと也

此の歌としつく伝へしたり上に伝越日出郷岸山へ上り
入りしは山奥の紫の庵にてむかひ侍るものなりしと
聞事ふ庵主の侍りて 禁中の武和哥の道
の道に達しけるに侍職風雅の道にも面白き
其の事を風俗の郷氏によしみ山の歌を
詠して面白き歌を尝しきもかく侍る人
にありし律師経兵としと俳諧をもはやくされと
職しましくも事をもめけし無歌は予も申すよし歌を
歌詠しところを小倉山岸の風は花のまをとする
とこそ其歌をよみて侍るらんと思ひしに是をもれ
ありて此親あり如くと伝へられはまは永のものまい
あり申し氏は遠く侍し由とんとあけの日夜とら

おつきて文傳由りうけ入りしに居室に留りし候
て此度はいさゝかりとん海郷しとなり

渡邊の氣性の事

坂和田云ゝ
大殿御稼御代には世に細なし甚だ御家にて
文武兩道の達人と呼はれて御家の武ひゝ達人
何もひは二人と御ぐあるまじく甚だ
云ふもさらなし清拝御めくて文武の達人とは称
坂和田云ふなるべしとの上意にて永井家と
あられた家来坂和田儀文武の英才なれど
しげきひかへまるの御意至永井しての各自
と相しなぐ敢て事来しと云とで申し今日迄しの

上意御座り二子方が加へりて家の光輝と相成ぬると
このほか好ひとられは云これを守く来孫の為
と殊に御摩鏡なる轟百年なりと覚く候
ひかる氣象様しは甚だ信白いつらく可ゆ書
すきに家督家督を継遊世相なりきも
いる家族めりゝゝや一時の英才なれは文編
の御めつく御ゆる英才かとゆふともあらんと
みんなるや

牛の玉の事

牛のむとく関係あるの思議なる事をある縁
白毛あるあると毛もし生へある物を自然と動かす
ちられと人くうる緒の物と嘗する、何の用を為さ

我ならハ頭陀の出るハ世間の牛將ハ蓄へ家にて
隣人百行某先年清国にて右の咄を聞り傳のあ
ありしに牛のゆゑり窺くありし其体ゆゑ
甚いひもやそのゆゑハ見ゆるにたり三年すもみえ
何れへ行き晩年の牛のどうとうけいくと牛を
そのまゝあり其飛やうの始まて押へとゞめし含付
おりし年くきしる牛を也やがてあるく事ハせざり
し勤く取ハ呑わ遣たハ牛の積中にある一液物ある
我や気しふとふりし扨も牛ハ別段なりしとや

鬼僕の事

営中何某といへる御番を勤し人の語りしハ
御目見以上の家にて一僕を召仕へ

召仕ひしに貞實にて能勤めけるが或日主人の寝室へ来りて
我事ハ是迄遠慮もなく仕僕致し候へ共我等人
間にあらず国元より来りし者にて暇を申度事なる
ますか語りしに主人ハ驚き事あるハ何とかいふ
なれども其子細を承り度と申けれバ僕ハ云ふ
我等事ハ順當に候へ共人の死體を取る
ものにて此度我等に仰付られ此程何村の一里
斗下の百姓何某と申す死體を取る事なれバ
然らハ暇を遣すへしと申しけるに何か其外に
聞ける記にしか其の僕ハ何某といふ者の
事ニ候哉と問ひけれバ何某の母の事なりと申けるか
其後風聞ありしに其日の雲霧起りて棺中の
葬送

死骸を出しけると家のもの申けると申す様語られしとぞ

怪病之事

清水の何某と郷し永井家の家臣に大久保内蔵助と

を親なりしか同人妹を何某へ嫁して其後男子

小家御して出生し越白気病のよし承知ありきを

不出生なりしかも其子細は[illegible]病気にさして無之

病をして以て[illegible]なれとも夜更[illegible]家臣[illegible]

[illegible]けれ共以て様井戸へ落しや又は[illegible]へ

帰りし[illegible]其事に[illegible]人[illegible]一向家[illegible]

貫[illegible]有り家内のものも[illegible]一向[illegible]は

[illegible]入[illegible]事もなし[illegible]今に不審

とされしと語りしも

乱心之者の[illegible]之事

永井家家[illegible]紀[illegible]ては布屋の何某と[illegible]

[illegible]番[illegible]の[illegible]と[illegible]首二ツ

三ツ[illegible]して[illegible]婦女の[illegible]

[illegible]会[illegible]不幸の後葬式と[illegible]

[illegible]の首を三ツ[illegible]何某の

[illegible]して大久保側[illegible]丈八郎の永井[illegible]

[illegible]に[illegible]

津和野領当衛之事

津和野[illegible]西国[illegible]長崎往来の場[illegible]

峻嶺の[illegible]久世[illegible]長崎往来の[illegible]

[illegible]業[illegible]と

してをの途偲と鼻筆とそらく気下ヶ気をすゝも
いふなる事なりし自愛人のあたりたの身にいふも如何
とえそすり鼻筆とおもひて子細なる事なりんと
丹州稲垣なり

儀の乱心一葉郎助か事

平ヶ谷へ来る事あれはえもとこ分へ雑事に出入するものえ
ち親の印形をもち深見へえるとえもと分の僕と
速さしかりしに夜ふのしはすり銭をたる瞞りて文来
りふらう瞞血しぬと讀るを持ゆるく不弁者のえ
えひ罵りけれとえもと今の乱心とそひけるを葉
電を二ふる田舎して理を断りけるに口を読みあ
りく年月のしらかなしとや毎するえいとこわうて怪と

ものされ好む楽は町家の手代とひとし主を手に乗ひ
しれのなる笑人の身となし身をもて目出度と分して讃か
出来なるは元にふうて逆之の事は佛との事ぞて一旦燃入と
気ひしと逆よるは世にふるは世人今の金あり在業主と今や
宏り世業をなれは存しゆくまるくと家を絶しぬ

賤夫斉女の事

出清国家の経傳中にはとしふれる好く其の事にて
好り今にしく久よ家にあるさとふ知の有なるに実経有
辰の表記に在経傳中にし安部と以之経
其の播田の出事に性我なりけると書きうたる
に持く分也もて家子絶しぬ
思ふ身躰あり有ては父母の其の之武家に仕へては

君のすゝめに随ひてや悪しく勤まゐらせしに凡二十年来
近きのへく合せと鑿しく此叶ひ庚辰の春逝去して拙者
やゝかつく此君の門を継ぐ九年に一気君恩にあまりて
近き待りし己の名醫常徳の良醫却人まされ葬家
のとゝまりくものゝ事ゝ年紀のまゝ去年ゝより家業に従
事在りは出て入一出ての網と如くも下や郷陽の
世の外をまで頼りかは蔭ふも知らんや人の有る
塞翁か馬とも云ふ哉者如夫
人相ひとし霰の関のあとまで拙者生れの後日

曲禅ふる事

寛政七八年の頃出世禅ゝとて代々やの業とすれ
けるに云ゝ得は敵をもぬけ古實敵をも召待おりさきの
形は無学蒙文ふると遠ざかる所に鬼ゝ流義の如きものゝ人
出てゝ三徳或は一流と建立と作る也し拙者もまた
ふゝの事をも或人の学問もかくの如く流の事なるとや
翻作せん鍋せりつくしに及ぶ之の二史しらせ学蒙ふる入流
之者流とつけにけるは世々にて家に集まるの文
人まで古今書の御の術とおもへ及ぶ家のゝ或事
に改めてそ術とつまくて一両撫でも稽古とつまり天狗
は扨も文宿るものゝ事や扨りん曲ゝその比ゝ其文と
建て私家同方の曲の事と云わ禅は蝉丸の字理まで
角ゝき禅ゝといふへきと禅の心とせんと呼禅字
と書禅へく曲禅にと唱へしと見えてなりし也
中一笑となりける

田嵐と追ふ呼の事

寛政七卯年濃州の内細見嵐多く吹けれ
とへ石谷の在郷人は田嵐と追ふ呼ふは強まて
嵐の形とてしら之杖にて手を振ひて悪しく追ふ
流る田嵐とも呼つけしと出来なくなるとや
虚実をしらすとも聞かし珍事ゆゑ記しおくや

別筆甚埋めるなり

備前の牧平新三郎といふもの国中御領の代官なり
続清しの女中生しまいふある撞読名結のやうにて
名くも患ひも解せ給われは山僧まて参りし気
は忌れける甚新三郎に語りける薬米秘
読ませおかしとてやうし伝経のある家へ到りたる

し読へ山僧とし出けるへてある陽法をとて火を
かけしは行の事もなく解しなや悪行する愚民
は見捐と呼ぶく行きて協れしんなゆゑとかけてと
解かすや又は騙しましく解けるまし空なくと喝へれ是や
たくと計らし尿とかりたれ共智薬をもいふなくてのミ

女之髪くと覚ふ抓之事

世にまて女の髪と抓え甚しや中すめり髪は血とて仕子
経須の一つとみえて中るは男と偽して又女と記の仏
身得んとりふとりあるとくわる経須子と(く)くく経者あるる
ふうても今は縄も貰ひ抓擢の事あるとこうかし
牧平条化の三郎まく女髪甚をとりまして女西三人を
しらす地抓てそのれ抽新して甚猿と郡しよ掲用

よ女の髪にてつまくおりしと傳ふるよし一説には傷
もとひしといふ

疱瘡まじなひの事

京猪熊通丹後守疱瘡と云ふ事すてゝけ
やうに来りしが未申ひきをむく百数年前より秘本
須彼方ニ家傳の秘法とりて疱瘡の病が
の呪ひと申すは出雲國にて生くべく十二月と申すとは
あのうして呪ひ方と鉄砲を書く出雲のうしこれ
と懐中致しまた疱瘡の神秘をしるしたる猪熊屋
むつかしき事致しまたはそのひしるしたる疱
来ると承りて仍て丹波かこひしるし世俗
ある人は切りて仕込みけるが愛て疱瘡卿の家に聞え給ふと

と申すは此方の系統にて伝へし書附たる丹波の新名ぬ
元より殺別の歌なる事
其月死人年々続く殊に南白年れは後し
知ぬ疫病の家中積年障り多く手本白毫を服す
人須みたして也有と見えし世上の死人も殺別の
手にてその秘方と誠り
又はしる所く傳は此書る背にかつても少年頃にまゐる気に向く事
其人の見なりともと云へし
手に震を覚え又つく生に好ける事に叶ひ悶よりとく有る
是人の新かしぬと云へし
又どうして悶しると仰へても可也相違なくつて使手べし
これ人の心得事と知るべし

又してもほしいまゝに孫自慢をせんと申されこそ
これ人のかたらひいつくしきとえへし
ひとつあるも気性にかはる足ひ生年にあひぬれ
その人の...とえへし
兄よそふい頭中[illegible]まき快目覚え[illegible]
かつ[illegible]のことかきそへらして
出まうる記ともかゝる御しるしかゝる世にありける
さらに常に[illegible]としてそのゝ記する神をかくてえ[illegible]
てよかし[illegible]かいゝ[illegible]かへしていへて
青森[illegible]これれ[illegible]
慶長年中[illegible]の事

寛政八年もしのびて[illegible]
しより晴屋何某中とらひ山児の銭取らる相州と自の
数みゆく妻白に書状にて怨性書判をそへ紀し宛
所に河童大明神にて以之取扱て川へ流せしに
早速快気をなして数へしに年中役病なる
兄弟性共と大蔵年はしの年中紀し流されし
今に所の年中守りて紀し[illegible]何某かたにと蔵する
何かなく神木を年々所の御体大日山黒までも相州
記と云[illegible]快気を記し河童大明神
と[illegible]してこれを快気にこゝろきゝ[illegible]
大気と祈しぬ
忠経天保[illegible]年

何れ種々の様子なれとも寛政の比
出羽の國貸附金と偽りて急度申渡と被仰付て已辰の
年より当分の間より今之儀御停止被仰付
日まて俄に立と出家入りて之儀御職の
まて露にも見とり若衆へ中まて何れも見まへ
様子の事なれは御停止に願ひ立にて
しもの貴賤の自由に申しもの又ハ候とも改申
之なり繁雑に相成る御国入の紙出し也
御停止のほかともなけれは御免被申り遣て候
て急度ハ此と云ふ事に付て申上けれは元より之申
之を被申り其帰りも因縁なる之事人の御用状に
一度に使けりし御継候をはんとも被申して

此ふしも当年より始まりて頻りに其の事出来ると覚へて当分
頻りに夫婦の者に是の姉になりける頗る無之儀ま心か
之の人に付てハ人毎に御人へと申して之儀の御付り
ひとしに何れも其内の意趣と威ねまて二人か子
子をれは漢の御意を之て候に付て身は此儀へつかわし
お後もいかにと之人おつつれて御座候の縁人へ帰へりかく
の御めりしに鬼神も気をしや之候へ之其の由緒に
事かれともこれまてかしこに縁人令其の御座
と凡しと之ふしとしまたも事ともとくこれハ存せり
御かやうにも急く事ともに之織頭の仕あれいとく
急子説明しも見えすりてかの縁子かたへて
町人数のものにて是ハ其の由御めにかつて某ん事して

あまたハ深川八幡のまへにいでゝ此所を鈴木とよびて
本町人のしよくの蛭とつきし八幡まへ通りの住みたるよ
うすく今にかくれる住みなれし年ハ二十四年の
男なりしかバ一ツ目の蛭子とやまの御屋敷の事を気を
今年の事を思ひしも此事をえて語りたまふあ
ふへらん絵草紙語りし世に伝ふ段あり御あと
くさハ難儀なく候まてし此郷にて住むにて語られ
の書付ハ今しる大坂の鉄をかく築山の
より今二十歳ばかり何事をしけれハ此上せ気の御心
しらし年と御覧なく御附にて古のこゝとを
すまひても御引にやすく御尋しるの鏡しる
暮からと居まして候たへに御門の由緒を申候へ

大坂にて出来判金判を両替にかへるゝよし聞し
又は書付やその大金と語りて驚きける様子
候くのものもえを語られ家中の評定笑 今は
しはしや語る事やら尋ねられハ御世今に怪しきる
大富の事もなりねと世人今々ハ此方が何事入らし
やかなるらく気に尋ねし是従くなるよしあらし候ハ
其りしの事なりと御の様子を語りけれハ大書にも
ものとおもく扱ひしてあるへき事大深川の兄さん人ハ
語りとかくらん世間の気にかかれと取り出して四離
して今御前の取り計事とも申し申し上げ候令方
あはれひの事やましぬ取り持ち取りにもかくや
然るものとして是ハ取りなく申しなさん世の中ちる思

と戯し給ふハ清風そこの中宮此人ささまハ子として仕へし
おりて姫君をつきまゐらせし此人を以る命ありとたてけ
なあへする命ありと申し かゝる太子よろこひ給ひて家を守
れとのへく其里河内へまゐり彼命子をかへし給ふ
それより姫君を介護し結び連ね御子をもちと見して
姫君も然ひとかけまるハ御かた天の加護ありとて人の
うやまひ給ふ

雷と蝶ふ者楽の事

昔々一旗の中に山寺佐伯の石河宗文配ありし
に右お文配し多門殿雷つとしてる人の家傳ふ雷と
姫君の御入子ふる楽あり此歌佐り給の楽をまく
雷の子るしきに此在く名を聞て奇怪の由を知ぬ

に昔より定めし事の楽のにし蝶しものくさま
秘する楽伝ありと人ひとひろはし昔より一族にて楽
世にもしし傳りしを宴なり紀組

乙酉 [illegible]

[illegible]

[illegible] 天の [illegible] 人の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

辰九中壹人ヨヨスハ
いき